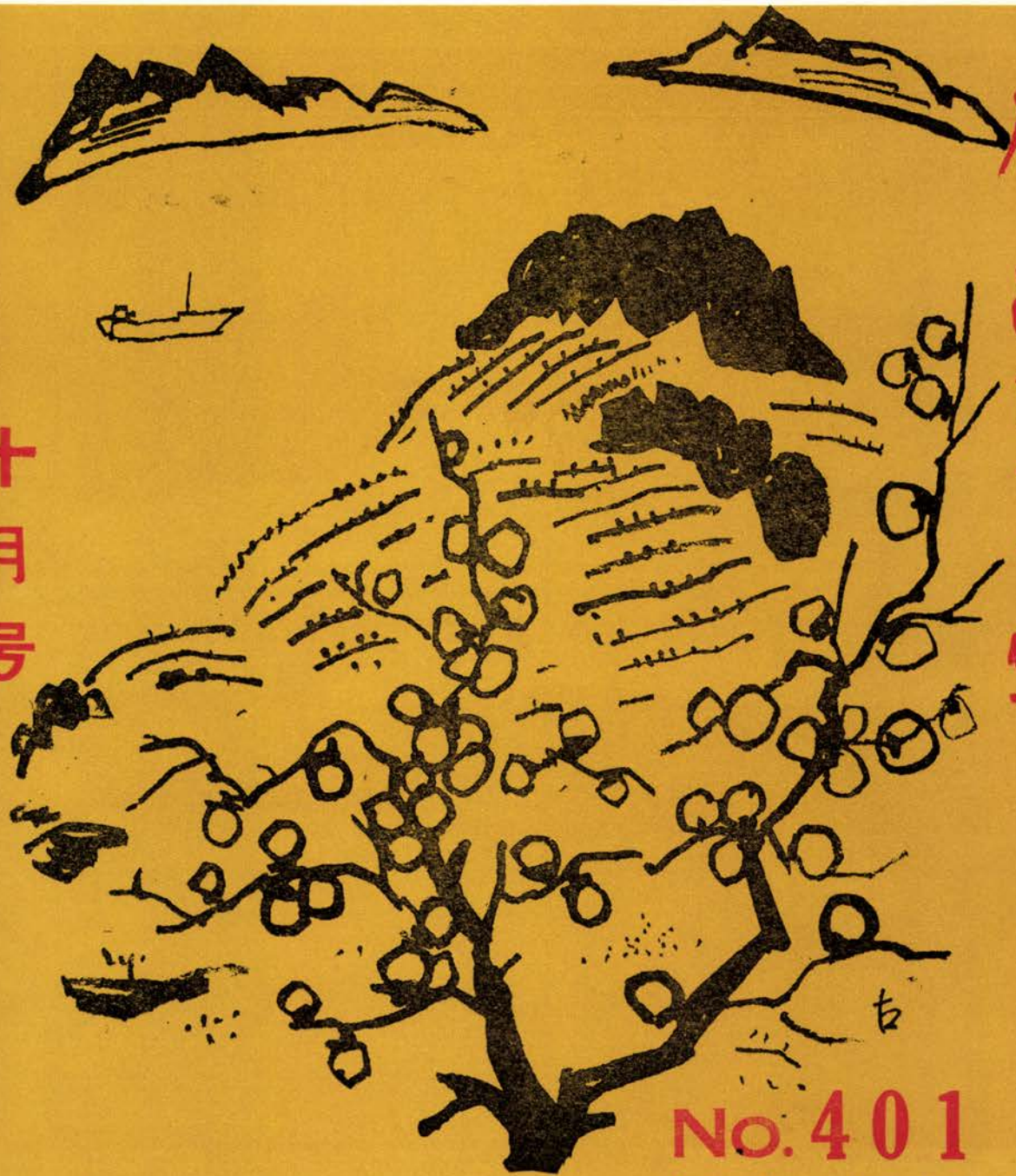


# 川柳の雑誌

十月号



麻生路郎☆主宰

No. 401

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

昭和廿二年七月一日発行 三輪影印所印刷  
昭和廿五年十月一日発行 三輪影印所印刷  
創刊大正十三年・通巻四〇一号

川柳雑誌社主催

# 本社十月句会

—11月本社句会—

「兼題」  
議員  
生き写し  
石段  
乗り遅れ

会場が変わりました。

やっと改装が成り、爽秋十月句会から  
もとの大阪観光ホテルで開催します。  
新しい方を誘ってご出席ください。

日時 十月七日(金) 午後六時  
場所 大阪観光ホテル (西三五〇八番  
市電道頓堀電停東へすぐ)

兼題 「古本」(三題) 麻生路郎選

読者の入道発表は十一月句会の会場で行います。  
『切腹の投句は無効となります。』(句集の裏へ附記人)

「貯金」(三題) 北川春渠選

「非常口」(三題) 菊沢小松園選

「わが家」(三題) 戸田古方選

席題 三題(当日発表)

柳話 川村好郎

アメリカ土産 16ミリ映画 足立春雄

呈賞 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・

与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・水新・舟遊・

柳家子・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一



あなたの句帳が  
出来ました

★路郎好みに、すばらしく気が  
きいています。句会でお使いになる  
なり、抜けた句の整理にお使いにな  
れば、何冊かで、あなたの句集の礎  
稿が出来ます。又柳友への贈答に、  
句会の賞品にも最適です。是非ご利用  
下さい。

一冊五五円 送費八円 十冊五〇〇円

大阪市住吉区万代西五の二五

川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一  
新 替 大阪 七五〇五〇番

麻生路郎先生著

川柳とは何か

送価 二五〇円  
三三〇円

—川柳の作り方と面白い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。  
絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽——そうしたもろ  
もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短  
詩型、それは伝統的であると共に常に革新  
的であるその川柳がいかんして發生し、経  
過し、今日に至り、将来に動くか、しかも  
その作り方は、味わい方は——以上を最も  
明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる  
著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

フルシチヨフほどではないが遠慮せず

胸くそ悪し 代議士の低姿勢

孫が去んで元の無口になる夫婦

孫の写真を何枚撮るんだと

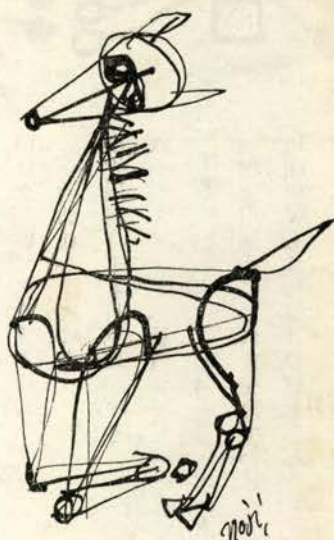
「マドンナ」に見降ろされてるベッド

菊田一夫作「がめつい奴」

見栄ぼうの底辺に触れたロングラン

「がめつい奴」を觀ても笑つて済ましとき

「がめつい奴」を商策にする社長



## 川柳雜誌十月号目次

★川柳書架 誌壽四百号記念祝賀川柳大会	(11)	★飛燕往来	(15)
絵と川柳で表現する歴史	戸田古方	香林・鳥	(26)
衣通姫	富士野鞍馬	すゝむ・亜鈍雀	(32)
髪の名は	不二田一三夫		(33)
上から下まで	東野大八		(18)
★			
川柳塔	麻生路郎選		(4)
同舟近詠	諸家		(9)
近作柳樽	麻生路郎選		(20)
金泥集	北川春巢選		(33)
各地柳壇	麻生葭乃選		(42)
柳界展望			(40)
★不朽洞会から			
一路集	中島生々庵選		(41)
「目ざまし」	福田妄夢選		(48)
★路郎メモ	那谷光郎選		(46)
★現代柳人録			
前田雀郎自選川柳三十五句	R・H・ブライス訳		(12)
輝やく巨歩	阿部佐保蘭		(13)
英譯川柳を再読して			
羽田を發つて	足立春雄		(14)
ブライズ教授の	麻生アト		(16)
南紀一泊	後藤梅志		(34)
川柳の大衆性	田中美喜子		(10)
川柳継承	麻生路郎		(3)
不朽洞句帖			
題字……麻生路郎・表紙……戸田古方			



豊中市 戸田 古方

船にまでせみがきこえて来たせま

むらくものカケラも見えずねむくなり

きれているのかつづいていのか島を賭け

大阪市 市場 没食子

夏バテと言うかペン持つことも愛し

惚れ抜いた人にボツクリ先立たれ

北海道へゆく月掛けを妻はじめ

西宮市 若本 多久志

総髪白くワイ談がきたならし

何ボンと言う程でない小唄なり

口紅をふいて男の愛を待ち

添う話別れる話秋に入り

事故現場今年も月見草が咲き

六十のフアイトへ社員傾聴し

大阪市 正本 水客

一身上の都合にされてやめていき

自問自答あさの鏡はひげをそる

皿くばり終えてボーイの白うごく

大阪市 丸尾 潮花

紙治でも来そうに格子灯がともり

舞い扇たためば女史の顔になり

祝大谷月都君長女誕生

一姫へもう父の夢母の夢

大阪市 西 いわを

悪らつな性なら定年迄も居ず

批評してくれとは讃めてもらいたく

堺市 八木 摩太郎

仏壇も買わず自家用乗りまわし

旧家にもよろめく人の離婚沙汰

岡山市 武部 香林

ルームクーラーなけりやと女中気が強し

ボーフラもラジオ体操しておった

大阪市 北川 春巢

齒科へ行く前にパーマで小半日

月賦病まだなおらない共稼ぎ

眼鏡かけかえて息子に意見する

不機嫌はうどんなの音をさせず食べ

女世帯で台所光って

ホノルル市 築山 快夢起

お通夜までゴルフ談義のはずむこと

低頭とニコボンやと組閣出来

大阪市 須崎 豆秋

病人の耳へ夜通し水が漏れ

やせすぎて検温計がはさまれず

絶対安静馬鹿正直の姿なり

ホノルル市 羽佐 間柳葉

ボスと云う地位は子供の世にもある

騙されて欺して女強くなり

鉢巻を外して今日は教育家

堺市 吉田 圭井堂

助手席に乗せて登校のママ得意

家計簿をきっちりつけてめめとらず

人妻が赤毛で足らず爪も染め

よろめいて来たとは知らずつけまほか

防府市 長野 井蛙

足どめのつもり一升留守へ置き

永年の経験進言受け入れず

票読みの誤算は金に頼りすぎ

岡山県 直原 七面山

郷愁の臉の底に水車小屋

気短かな父だが恋の邪魔はせず

ライオンの様に喚いて見たき年の瀬

カバよおいらも大きな欠伸して見たし

腹上死と聞いて親せきまで笑い

貰われて行く子の鼻を拭いてやり

好きなこと喚めかせといて手錠かけ

大阪市 西森 花村

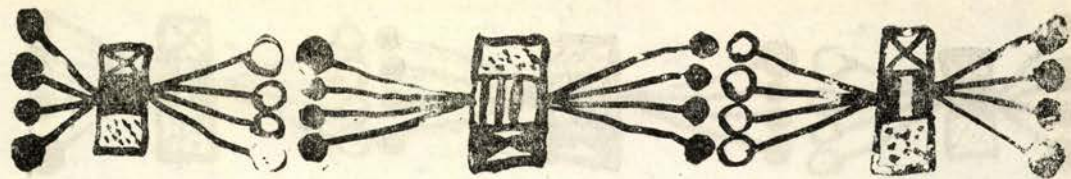
八月十五日夜通し虫も鳴いていた

ああ青春故陸軍歩兵上等兵

月だけを残しナイトーみんな消え

二十年さきの話の隠居部屋

函館にて



半袖を振りかえられるほど涼し  
手はじめがさのき安来で締めくくり

會敷市 木村 千容

あと腐れ拭うてくれる妻がいて  
濡れ衣を着せて妬心の憚らず

加賀市 野村 味平

関節と汗症を病む

膝頭切ったらどうかかわれ

色づいた柿へ消息まだ知れず

大阪市 木村 水堂

解散が近く大臣よく笑い

幽霊の出そうなところで逢曳きし

のんだくれでも父ちゃんが好きと云う

葬式がだぶって代理いそがしく

高槻市 福田 丁路

大げさな愛の験の身のこなし

恐るべき次代を荷う子の遊び

哀れなるかや選挙に備え平伏し

奥の手は三伴九伴すすり泣き

盛岡市にて

東北弁を大阪弁で聞き返し

通訳がほしい東北弁の美人

大阪市 真鍋 一瓢

座して食うて泰山に似たお女将さん

蜘蛛の足が一本折れている凄み

頭数だけの男に椅子机

大和路で

山の空家にペンペン草が持つ凄み

大阪市 後藤 梅志

炎天下足場の上も人が居り

みな蟬は高いところに高野山

テレビ見て弱い巡査にあき果て

引導を渡すに眼鏡かけている

禿げっぷりも後ろは他人任せなり

米子市 小西 雄々

愛嬌は悪し三代婿養子

にっこりとせずたのしい婦人科医

大阪市 山川 阿茶

手料理で招ぶ自信つけ嫁にやり

赤札の浴衣と知らずほめちぎり

大阪市 金井 文秋

万引に狙われたしてからはやり

洋服屋のウインドカップ売る如し

よそさんの本借って来る本屋の子

月賦とは縁が切れない見栄を持ち

加賀市 那谷 光郎

キャンデーの捨てた箸にも蟻が集り

村のバス背に蝗をつけて乗り

もう下駄箱と言うなモダンな靴ばかり

東京滞在三週間(四句)

東京にちよいちよい美人すれ違い

ラッシュとはこんなに多い人いきれ

銀ブラで大阪弁に耳を立て

もう用のない東京を見捨てたり

大阪市 菊沢 小松園

人間ドック以来神経質になり

ストリップ見てたと子供等に云えず

失明のそれから人間出来て来る

しぶちんの財布覗けぬ位置で開け

叩かない親と子供等見くびって

絶景へ身の毛のよだつ家が建ち

岡山市 逸見 灯竿

台風にとじこめられた子の将棋

出雲市 尼 緑之助

月が出たのにむつとりとした炭坑

弱肉強食敗はたたかれた

わからない唄がはやって老い初める

おしほりへ胸毛を出して遠慮せず

鳥取市 杉谷 湖山

チンドン屋だまって歩いて黄昏れる

独り者貯金の残りまた調べ

ガム噛んで電話の順を待てる娘

夏に負けるなど今日も天ぶら揚げる妻

京都市 大鶴 喜由

圏外に宿り台風聞く生活

勤めていれば云うてくる嫁の口

溜息は妹の器量持たぬ姉

ブローチの下真ごころのあるやなし

折檻の傷を実父にさえ見せず

東京都 山根 白星



忘れ易きものに人の名女の名  
不自由な脚で仕立屋立ち上り

大阪市 富岡 淡舟

ビタミンをのんで居ますとやせっぽち

定年で家建てるのが望みだけ

奈良県 飯降 白香

養老院ここでも金かものを云い

自家用車家族も犬も乗っていて

ニコヨンの臭気紛々街を行き

岡山県 福島 鉄児

いちじくに似てる女のなまめかし

青リンゴの如し女にまだなれず

岡山市 服部 十九平

砂埃今日はデイトの場所を変え

命なき砂さえ握れば音をたて

砂を敷く敷かぬで奉迎委員採め

尼崎市 長谷川 三司

お小づかいだけよと女勤めに由

爪弾の主はシミューズ一つなり

二本立きようも隣は鍵をかけ

大臣もカレーうちの子もカレー

大阪市 山本 葉光

かすかな風をほめる病人

叡山に行こかと涼しがらすなり

岡山県 田村 藤波

幸福は腹の底から沸く笑

道芝の運命そのまま吾がさだめ

恋文がマジックインキじゃ太すぎる  
岡山県 岡田 夜潮

見島市 本田 恵二朗

カレンダー運にまかせた日が並び

京都市 松川 杜的

墮ろしてきたのはつきり女事務

臆くうな親と子供はもう悟り

汗たのし老のいのちの皺を打つ  
岡山市 津田 麦太楼

おじやちみアップの襟の涼しそう

後と釜に婦長あがりを入れて病み

晴耕の指にささったバラの棘

堺市 高崎 雄声

赤いシャツ男にお株奪られたり

迎え傘齡をとつても嬉しくて

無いものはほぎけ金権候補勝ち

島根県 藤井 明朗

こだまする汽笛へ秋を意識する

流行を追うて女に秋がくる

ひなた水見たいな愛が物足らず  
岡山県 永松 東岸

妻までも出世に利用する恐さ

ラムネ飲むようにビールを飲んで去に

倉敷市 野田 素身郎

夕立へ二階の夫使われる

子供までいるのに愛称で呼ばれ

大阪市 清水 望峯

店はひま妓にみんな呑まれとり  
女給に無視されチップまたやった

自信ある妾ばりばり使うとり

一本のビールも妻の監視つき

酔いどれの眼へひょうきんなボリスマン  
大阪市 伊達 堰子

観光バス地獄谷見る客で混み

混浴と判れば俺も男なり

大阪府 不二田 一三夫

デュー・ヘアで岸恵子補日

真知子巻き残し デューオを持ち帰り

タニシ冠ったようなデューオ街をのし

台所スイッチだらけで何か焦げ

兵庫県 酒井 ひか平

おばあちゃんまでがビタミン二つ飲み

どつちから口説きやはったと娘に聞かれ

不覚にもお釣り渡せば握手され

自惚れの胸毛わざわざ引っぱらせ

父の夢娘の鼻をつまんで見

大阪府 深見 雅堂

冷房とアスファルトセールス楽でなし

今日の糧車巻ですつたらしい下駄

神戸市 丸川 初甫

ハンドバッグ口金の音で買い

かなつちのママに貸しとく浮袋

賭け麻雀の話吊皮持ち変える

岡山県 池田 古心



抗議する激論赤にされていた

貧農の反抗侮蔑の眼で見られ

拒絶したばかりに女出世せず

大阪府 早川 清生

山坂の里に成人して無口

相談欄顔のみにくさには触れず

女子寮の夕暮れだれか髪を解く

女給婦々バーの植木は水が切れ

どや街に夫の稼ぐところ知らず

岡山市 武部 若菜

皇太子岡山にお着き

萬歳はわたし一人の皇太子

お迎えの道へホースの惜しみなく

お手製と聞いて賞め方まで変り

脱ぎ捨てたとこへ又くる夏の客

堺市 辻 圭水

錯覚を信じてしもた恐ろしさ

平つらし冷房出て行く命を受け

定年になつても夢を捨てぬ人

辞令一枚無口の人にしてしまい

木の蔭で夫の帰りを待つ若さ

大阪府 児島与呂志

中庸をとって憎まれからはずれ

洗濯のタイム合せて立話し

麻雀で徹夜したような夜の汽車

西宮市 小浜 牧人

大阪の夜景をあとに旅費が切れ

夏休み済んで手紙の恋となる

銀行へ取られた空家覗いて見

大阪府 菱田 満秋

刑務所を出れば真夏の太陽

盆おどりうちの子はもう女なり

インテリに自殺の道がまだ残り

兵庫県 前川 左文字

霧晴るる古城へ試歩の道延ばし

図書館を読んでしもうて御全快

大阪府 橋高 薫風子

つとさした夫の傘の大きさよ

鳥籠に雀飼うべき鳥ならず

或る恋

独楽二つ回りいることは息苦し

絵はがきの修学旅行はまだ続き

規約でもあること盆に西瓜買い

奈良市 宮口 笛生

喫殻で枕木もえている暑さ

大阪の不便近所が聞き出せず

大阪府 西川 晃

切れ切れの思考の果てを銭勘定

愛情を皮膚で確かめねば済まず

お茶で咽つたらせるほど慌て

岡山市 林 葵丘

これだけの事かと錦帯橋見上げ

七夕を養老院も一つたて

神戸市 仲 どんたく

落日とは妻のへそくりさがす夜の

ハイクラスなんだぞゴルフバック行く

鳩のえさ忘れんといてと子の便り

やらずの雨なぞと云われて腰をすえ

平田市 久家代仕男

夕顔へ暑さ落着く陽が沈む

投薬を間違ひそうな暑さです

聞えてる証拠が癪な咳払い

麻雀が待たすと知らぬ応接間

出雲市 原 独仙

憚らぬ姿態女の夏の部屋

月見草千切つて語る土手の恋

他所の子を見れば比べるくせがつき

よければ買えばよい気で旅に出る

岡山市 江国 幽谷

金少し溜めて家相を論じだし

祖母の風邪日蓮さんへ手を合し

末ッ娘が夜道を平気で歩き出し

岡山市 光好 陽子

自尊心寄附の額まで無理をさせ

死なれては困るお方の肩をもみ

四階に住んで朝顔まだ咲かせ

西宮市 河相すゝむ



バラソルに流行がある柄の長さ  
放言はほんとのことを云うただけ

西宮市 野呂 鶴汀

男の子着物着る間を閉め出され  
空青し人に大志を抱かせる

西宮市 樋口 舟遊

トルコ風呂自分の洗うところもあり

葬式に行けずお悔みまの悪さ  
帶かたし妓は鏡へふりかえり

新潟県 高野 むじな

奥さんになる人らしいと見抜かれる  
乗せて貰う方が断りたくなった

高砂市 吉原 紅月

鳥羽にて

口紅も濃ゆく観光用の海女

大阪市 欄 蘭

労基法無視した様にこき使い

大阪市 石倉 旅風

ビタミンを野菜ぎらいの腕にうち

油絵を替えて暑さに堪えんとす

雑音は聴かないことに癖づける

大阪市 魚住 満潮

続西成界わい(五句)

ジャンジャン横丁刑事に背中叩かれる

姦夫姦婦おんなは顔をようあげず

同棲三年亭主の名前まだ知らず

ラムネ一本死人の口にそそがれる

血を売ったお金窓口から貰い

堺市 田中 狂二

防犯長しててまんまと詐欺にあい

父親が眼をそむけてる娘のボーゾ

親切が何時か噂の的となり

大阪府 林 昌男

発奮をすれば女房が不安がり

愛称で言えはつきり思い出し

紅白にわけて婦人に勝たせる気

愛媛県 村上 旭童

家だけの豊作でなきや風にいらす

子が二人花も金魚もあきらめる

倉吉市 大前 鳴光

金の要る恋とわかって捨てられる

紅燈の媚と思えど又おほれ

鳥取市 北村 三歩

警察が落した場所をきめてくれ

刺青は見せとうはない長いシャツ

相談にまたも同情しとうなり

狂人と同んなじ位置の泣きほくろ

神戸市 傍島 静馬

苦心してママはいびつの寿司を巻き

景色よりバスのあえぎに気を取られ

ごめんと云わず尻から割り込まれ

仮名づかい二年の孫になおされる

ぼろそうな話に昼寝細眼開け

笠岡市 木山 遠二

置物のよう部屋に居り老たのし

隠さない乳房哀に萎びとり

おないどして大臣こっちは小百姓

大阪市 村山 光輪

コマーシャル美人は表をたべて居り

二次会のマツチを妻に見せて寝る

浮気には定年なんかないらしい

朱提灯おうた子だいた子一つずつ

出雲市 野村 岬月

足ぬらすだけで露わな海水着

古いのね染めたパーマに叱られる

岡山市 宗高 矢寸志

米持って行けと老母はまだ達者

初恋の彼女へ家業を少し恥じ

電化成ってから事務的な妻になり

大阪市 河井 庸佑

もっと早よ出せと宿題へ父の声

遊ぶだけ遊んだしわよせ父へくる

五日前の天気きいてる日記帳

大阪府 谷 沢 好祐

月曜の首に水着の紐のあと

マネキンを邪険に扱う女店員

泉大津市 高津 徹也

驚舞うて空の青さをひきしめる

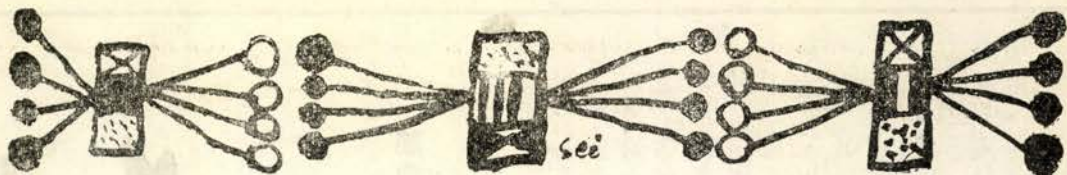
バスガイド郷土史うまく拝借し

愛媛県 榎 紫光

テレビ料理メモしたままで食べさせず

おばはんが呉れて煙草も不味くなり

ぬけぬけと相談欄でまで惚けけ



青森市 工藤 甲吉

家出して東京タワー見て帰り

鈴虫は北の国まで売られて来

事件記者はつき歩く犬に似て

起って座って居眠りをして議員

一時間待たせ二分で歯医者済み

無一文「営業中」を見て通り

西宮市 門水 三舟

お人好し怒るところでニタニタし

姥ざくらこれ見よがしの化粧して

噂ほどまだ愛人でないらしい

玉野市 伊原 明林

目の前で包む祝儀へ目のやり場

嫁さんはいらぬでしよう洗濯機

人形と眠り働く母に馴れ

大阪市 藤村 梨花

風ひとすじ秋の気配が蚊帳ゆする

おかしさを肩でこらえる娘が並び

うっかりと生徒のあくび貰いかけ

置き去りにされて貝殻夏の夢

神戸市 室田 千尋

どうしても嫁く気になれず母と寝る

他人行儀子の情操を重んじる

豊中市 林 夢紅

不精罷ばかりで鏡も淋しから

鏡破っても破っても顔映す

愛は梅なし豆腐一丁分け合うて

もう何も脱ぐものが無い昼下り

髪長き少女は秋が好きであり

孤独積み重ねても重ねても海に及ばず

堺市 吉本 青風

無い無いと云っても女すこし持ち

また比較されて二代目気が重し

外遊後会う人ごとに握手する

男また遊んだ事を話し出し

西宮市 山本 一傘

長男出生

もうおねえちゃんやでと上の子に聞かせ

まあまあ顔やと真上から覗き

良すぎてもいかんと書きよい名にしとく

口爪髪それぞれつける色があり

大阪市 今西 生菫

田草取りいなこの脚が陽をはねる

痛と聞きヤイノヤイノと見舞が来

滞納の家賃も家主税とられ

京都市 室井 八九寸

祇園祭

投げちまきついに彼女へ届き兼ね

アメリカへだらりみてほし空を航く

貯めたのが損をした例並べ飲み

京言葉上代仮名をみる感じ

# 同舟近詠

敦賀市 船木 夢考

こおろぎへ勝手のちがう電気釜

くつわ虫夜店の音に負けていず

わが足が邪魔きりぎりす籠の中

須坂市 高峰 柳児

遮断機で商売仇に今日も逢い

冷房へ通され陳情小さく

言い負けてくわえ煙草もして居れず

雑沓の渦迷い子へ道があき

今治市 長野 文庫

漱石が先ず開かせる読書の目

破れでもよいと待合用雑誌

情熱を失ない聖書束で売り

涼み台でも受験生豆単語

ビタミンの力も借りる受験生

図鑑見て雑草に名をつけてやり

社会欄読んで疑い深くなり

原作の気分が出ない仮名遣い

辞典にはこうありますとつきつける

和歌山市 秋月 安方

命知らずは米いと谷川岳聳え

さすが国技物云いなぐりあいもせず

ガス会社自殺出来る時までいわず

暑くともせみのど自慢まだやめず

新居浜市 月原 宵明

騙されてみたい女の声が良し

旗振った過去面映ゆく役に付き

悪筆が疵にもならず東大出

サンガラス夜も外さず職が無し

息子めがはや老眼になりおった

# 川柳継承



田中美喜子

## (1) 謡曲の中の川柳

あの蒼大な堆積には驚くが、歳時記の圧縮された日本語の美しさには魅せられもする。将来どれ程増えるものか風習の項に忌と云うのがある。概して文人俳人の名を連ねてある。故人追慕の表示であろう。古いところでは「梅若忌」と言うのが春の部にありますが言うまでもなく謡曲の「角田川」「都北白河吉田少将惟房郷の独り子が人商人にさらわれ隅田川のはとりで病死する。時に十二才、木母寺の梅若塚がその墓。この哀詠と謡曲「桜川」とで賤機帯と言う長唄の名曲、作曲共々優美、古今集や業平の歌さ

えしは塚の上の、草茫々として験ばかりのあさちが原となるこそあはれなりけり。」と終っている。

謡曲の本質は言うまでもなく幽玄、ここに何故謡曲を掲げたかと言う事は江戸時代

が言うまでもなく謡曲の「角田川」「都北白河吉田少将惟房郷の独り子が人商人にさらわれ隅田川のはとりで病死する。時に十二才、木母寺の梅若塚がその墓。この哀詠と謡曲「桜川」とで賤機帯と言う長唄の名曲、作曲共々優美、古今集や業平の歌さ花を掬うあたりの風情は情趣豊か。これ等日本古典文学芸術の心髄風格汪溢と言う処。角田川では船頭が狂女との対話が哀れ深く出ているが「子」を思う道に迷ふとは今こそ思ひ白雲の」と念仏唱妙の中にまさしく我が子の称名を聞き「声のうちより幻に

これが隆盛を極め諸大名武士等争ってこれを嗜んだとある。能楽を式楽とまでなし下に普及をつとめたと言う時代、謡曲の文章は源氏物語と、ともに難解で古事引用等々煩らわしい。謡曲作者は別としてもこれ等口誦にのせる人々も相当学力を要した事は察せられる。幕府が謡初めを恒例として催し能楽狂言等には町人の主だった人々も城内招待さし許されたとある。何百とある昔からの夥しい謡曲作品と共に生活した階層が当時のインテリであった事にまず間違ひはないと思う。この人々によって詠まれたであろう謡曲を取り入れた川柳作品が非常に沢山残されている事は当時の人情

風俗等々歴史の上にもさまざまに投影されている事を知るのである。

中には聞きかじりの句やもじった句や他方に重点を置いた句も相当多いのは作者が武士、大名ばかりでなく一般庶民が多数あった事を物語るのも当然だが。日本文学を反映させて、

都鳥今に吾妻のなみだ雨

(樽三七)

梅若忌(旧三月十五日)この頃雨多くこの日降る雨を梅若の涙雨と言う。

あわれさは気狂のくる一周忌

安五

美しくも哀れ深い句である。

三囲のあたりからもうぶちのめし

樽一

夜死ぬと隅田川原へ蹴込むとし

安七

人買がぶちのめしたり、蹴込んだりは、川柳の飛躍や取越し苦勞とも言うところ。

季節の美しさに囚われて梅若忌に余りにこたわり過ぎたが、季は川柳で言う題詠に当るようには思えないであろうか。

季はそれが其処にどうしても置かれねばならない安定感と情感の中に溶け入ってしまわねばならない事は、川柳も題詠はそれとも知らず、その零囲気にびつたりと合致させて、冠付のようにならない句が文学性等から見て大切であろう。江戸文化最盛期の教養と現代の教養その学力等の観点の種々の相違を考慮しつつここに掲げた謡曲題材の比較的地歩の高さから例に取って見たのだが、惜しい事に古川柳の持ち味の娯楽

色紙短冊  
書画用品

大坂戎屋

丹三月堂

中町二丁目

## (2) 昭和と川柳

の域に止まっているのを認めないわけにはいかない。気魄の不足人生観の浅さが目につくのは致し方ないのだ。が当時代の背景や思想を考慮すればやむを得ぬ事でもあるし、古句は古句としての幾多の名句は充分その良さを学び味わうべきだと思う。主として四書五經に漢詩其他に磨かれた謡曲愛謡時代に対比して現代文化の進展はマスコミと相俟って庶民の教養の程度も別な意味の著しい変化と発展とを遂げている。自由奔放、千変万化の題詠が川柳に及ぼす影響も多大である事も従って当然であろう。

複雑な現代に於いての人間関係のスム！スにするため、その努力と理解を深める事は大切だがより一層美しくするための教養とかそのための人生観を深める事の重大さを人は忘れてはならない。社会生活上、相協力し或は体験を語りつつさまざまな智慧

を学び頼り合う人生のむずかしさ。

かつて家永三郎氏はかく言われた。(昭和35年1月日本文化の将来の中より)

『民主主義を占領軍からの「配給」として片づけるのは一面的である。日本の民主主義がたとえ細々ながらもせよ日本民衆の間で守りつづけられて来た尊い文化的伝統』と言っており、日本民衆の文化継承発展を心から望んでいられる。全く貴族の創造になる宝物其他の文化に縁遠いのは庶民達である事を知らされる。正倉院も桂離宮も知らずに終る寒村離島の人々、或は富士山も遂に見ずに死んで行く人達の何と多いことか。

これ等の人々が生みだすささやかな文化の素朴さは民主的基盤の上に立って今少し高く評価すべきだ。そして現代の人達には気安く物を言い合う自由と広場だけが残された楽しみかもしれぬ。

互いに相手と呼び交し笑いかけ話しかける時、其処に湧くのが人間の真実味、何のてらいもみせかけもない庶民の誠実のまなざしだけがある。人間は到底孤独では長くいられるものではないのだから。これ等の人々の不幸は大学で学び得なかった事、又は貧しい生活に病み疲れ果ててゆくものもあろうしさまざまな。が一様に現代は苛烈な世界情勢の不安におののき勝ちな事は誰しも同じだ。

寄り処を絶えず求めつつ希望を捨てず、あせりながらも努力し合う姿は美しいものだ。最底辺文学と言われる十七文字文学が

其処に根を張ってぐんぐん育てられて行った事に何の不思議もないのだと思う。日本庶民の独得のつづやきがこの川柳となり、その哀歓が十七文字となって吐露されてゆき理解を求め領き合うのだ。たとえインテリもジャーナリストも無関心でいようと見捨てようとも。

芭蕉が旅から旅に老をいとわず庶民の生活と自然と共にかけ巡りつつ味わいその中に浸透し切った庶民の情感を身をもって体験しつづける喜びも悲しみも胸に痛い程沈潜されたところの結晶が数々のあの名句となって人々に泌々と迫って来る世界を創造していったのだ。俳風柳多留初編が世に出たのが(一七四八)俳句及び川柳の成立を考える時俳聖芭蕉の偉大な感化を強大に受けている恩恵を今更のように気付くのである。芭蕉初期作品に、

海暮れて囁の声ほのかに白し

と言うのがある。辰野隆氏は(昭和五年マラルメ論)の中で大変マラルメ的だと論じている。天才俳人の象徴句と言うべきか。晩年は「高く悟りて俗に還る」と精神内部の凝視を通しての枯淡。それにしても、ヴェルレーヌ——ヴァレリ——(一八九四——一九四一)とこれ等フランス詩人達よりザツと見て二百年程も以前に謠曲に或は芭蕉の俳句に象徴的作句を見ている事は驚異に価する。

もっともフランス詩のこれ等の象徴の難解な事や俳句とその比較も無理はあろうが芭蕉によって完成された俳句。川柳を確立

した俳風柳多留、これ等十七字を固執する、この世界が現代に於いてどれほどの進展を見せたであろうか。その点何か心細い頼りなさを感ぜずにはいられない。ここで文学上詩性と言う事が屢々問題視されるのも人間は詩を愛し育てたい気持ちに絶えず抱いているものである以上当然の事であろう。人間胸底にひそむさやかなながらもその芸術性を引き出して行く事が人間に希望を与えつつ向上への一筋の光明ともなる、これ無くして川柳の前途も考えられぬ。庶民文学の永遠性とは今後なおも人間の不思議に取り組む心理探求、あの善悪相反する二面、そして、人間が引き起す戦争、水爆を創造した魔力等を考えると、柳人達にも拡大されて行く領域の前途の責任は重い。安保も三池争議も津波も悉く深く掘り下げてゆき上すべしにならない事こそ大切と思う。時代と共に歩みつつよりよき住みよき社会に向つづける一人一人の協力の集積こそ尊いものなのだ。我が国の小説が90パーセント恋愛ものであるところによりき諷刺は育たないとは亀井勝一郎氏、国際会議や学術会議でコチコチでユーモアもウィットも乏しいと嘆くのは中山伊知郎氏、何か日本文化の跛いで欠陥ある事を物語るように仕方がない。底辺文学、庶民文学と言われる川柳が何等かの形で啓示を与えられる事あらば結構な事と思う。川柳継承の使命と共に川柳の地歩ももっとと高めたいと願うものである。

(筆者・田中辰二氏夫人)

續

## 川柳書架

(2)

### 川柳歳時記

(山路閑古著)

★著者の序文の一節に、

古川柳というものを一般読者に読んで頂くために、極く著名な句のみを選んで解説を試みた。唯それだけでは読物として趣味が偏るので、拙文随筆をも若干挿入した。パンの間にハムや辛子を入れたような積りである。健康な読者は、ためらわず頭からよりもり食べて下さい。

(以下略)

一九五六年十月一日

山路閑古

★目次の大要を挙げると、

川柳とは。季節。人間。職業。生活。歴史。地理。遊芸。用具衣服。動物植物。青楼。

★昭和三十一年十一月一日第一副発行。二

〇六頁、定価二一〇円。発行所東京都港区芝浜松町二ノ一五、美和書院。

★苦しまずに、古川柳の味が判る書。

# 前田雀郎自選川柳三十五句 (2)

アール・エッチ・ブライス訳

Thirty five senryu (Witty Japanese Verses of the shortest type)  
self-selected by Maeda Jakuro Translated by R.H. Blyth

流れ見ており 身の上を見詰めおり

Nagare miteori minoue o mitsume ori

Staring at the current,

Staring

At my Life.

不見転も 客も黙つて 朝のお茶

Mizuten mo kyaku mo damatte asa no ocha

The prostitute and the customer,

Both silent

The morning tea.

鮎二ひき 暫く焼かず 皿の上

Ayu ni hiki shibaraku yakazu sara no ue

Two fresh-water front,

Leaving them on the plate,

Not broiling them for a while.

寝る智恵も いろいろにある 夜の汽車

Neru chie mo iroiro ni aru yoru no kisha

Various kinds of wisdom

As to how to sleep,

The night train.

手の筋も 淋しい時の 足しになり

Te no suji mo sabishii toki no tashi ni nari

The lines of palm also

Help,

when we are alone.

五月かな もの皆天を志ざす

Gogatsu kana mono mina ten o kokorozasu

Ahi the month of May!

All things aim

At the sky.

母と出て 母と内緒の 氷水

Haha to dete haha to naisho no koorimizu

Going out with ma,

And drinking sweet iced water,

And keeping it between us.

打明けて 夜が夫婦に 新らしい

Uchiakete yoru ga fufu ni atarashii

Letting each other into the secret,

New is the night

For husband and wife.

ひぐらしは 物思えとて 鳴き止むや

Higurashi wa mono omoetote nakiyamuya

Ah, cicada!

Have you stopped singing

So as to make me sink into thought.

幸せを 思ふ僅かな 事一つ

Shiawase o omou wazukana koto hitotsu

A feeling of bliss

At such

A little thing.

# ブライス教授の

## 英訳川柳を

### 再読して

#### 阿部佐保蘭



友人に頼まれブライス教授の“Senryu” Japanese Satirical Verses 第四版を買求めた序でに再読した処、小生が八年前にブライス教授にお送りした誤りのリストが、元のままで訂正されていないことに気がついた。それは例えば春雨(Harusame)が依然として Shuna となって居り、好浪(Karō)が Yoshirō 当百 (Tōhyaku) が Tōbyaku として発行されている。かかる訂正箇所は氏の外に迂生の気のついた丈でも十七を数える。これは明らかに発行者北星堂書店の怠慢としか考えられない。と云うのは八年前小生の送った正誤表に対しブライス教授から折り返し御礼状を戴き、その中に『間違いのリストを送って下さいまして有難うございました。北星堂では来月この本を再び印刷する予定です。出版者は間違いをその時訂正されるでしょう』とあるからである。私が誤りを発見したのは再版で、この御礼状を戴いたのは第三版が印刷される直前だったから、当然訂正されねばならぬのが、そのままになって第四版迄持ち越されている。これは甚だ遺憾なことである。この外にも訂正を希望したい箇所がある

ば、全柳人がそれを読んでアドバイスする親切があつて欲しい。海外へどんな紹介される川柳に就て余りにも無関心な嫌いなきにしも非ずの感をうける。最近戴いた大木笛我君の書状の中にも『ブライス先生は今の柳界で知る人ぞ知る程度なのは情けない次第で、雀先生も以前そのことを言っていました。が、昨夏長屋連の月次会が根津須賀町の迷亭居で開かれた時、雀師から電話で、これからブライスさん同道で出席するから支度を頼むと申して来ました。と云うのはブライスさんは清教徒なので肉類は駄目、野菜なので大忙しで迷亭夫人が支度を致しました。その時鮎の形の牛胆の中に包んだ焼菓子を出したら大変喜ばれたのでお土産とした事があります。長屋の会は句作後酒を飲むので話も滑らかとなって、ジュースを召し上り乍ら皆のお喋りを聴いて居りました。酒なしで整然とお話が聴きたい処でした。私どもの「せんりう」は雀師からいつも貰っていますとのことでした。記録もなしの話しっ放しは今思うと惜しいことでした。印象は隠やかなうちに親しみ易く、気取りのない方でした……』とあり

故雀郎先生もこの点を嘆いて居られたことが伺われる。このブライス教授の英訳川柳は講談社発行の谷脇素文画伯描くところの「川柳浮世さま」その他の著書から採集せられたものと愚考されるのであるが、十年前の著書丈に現在読んでみるとブライス教授も云われるようにもう一つ何かもの足らぬものを感ずるのである。それで恐らくこの十月頃に矢張り北星堂書店から新たな構想の下に“Japanese Life and Character in Senryu”を出版される事になつたらしい。どう云う内容のものか、川柳家の一人として今から待たれてならない。浮世絵の価値が最初外国で認められ、続いて国内でも改めて識者に見直され、珍重された例もある。川柳なども多分にその例に洩れないような感じをうけるのである。在日四十余年のブライス教授の著作に対し、和歌俳句に対し著書の少ない柳界に於いてその参考書その他に於いて柳人の蔭の依援を望むや切なるものがある。例えば路郎先生の「新川柳鑑賞」の如き所謂解説付のものこそ、外人は勿論一般人にも貴重なものである。この次の著作に間に合うようブライス教授に是非プレゼントしたいと考えている。川柳雑誌四百号記念号にはブライス教授が「前田雀郎自選三十五句」の名英訳で誌上を飾って下さること期待しているのであるがその前にブライス教授の Senryu の中から川柳雑誌関係の先輩柳友の句の一部をピックアップさせて戴き、拙文のラストを飾らせて戴くことにする。

その頃の女は云ふがままになり

At that time,

Women

路郎

Were so obedient! Jirō  
This senryu refers to women of  
past ages, so much more willing  
to please and be pleased than  
modern women.

偽りの世を鉄橋の下から見

路郎

Looking out  
At this world of lies,  
From under a railway bridge-  
Jirō

To the man who lives in a  
dug-out under the iron bridge,  
the Christian or Buddhist world  
he looks out upon may well seem  
what it is in part, a world of  
hypocrisy and falsehood.

盗み心のないが乞食の自慢なり

半文銭

It is the boast  
Of the beggar,  
That he has not a thieving  
mind. Hannonsen  
Stevenson says somewhere that  
even the most depraved man has  
his ethical code, some level below  
which he will not sink.

波の寄るたびに鴉は少し飛び

日車

Each time a wave breaks,  
The raven  
Gives a little jump. Nissha

This verse is senryu, if it is so, only because the raven is a humorous, ungainly bird. Otherwise it is a haiku, and a very good one at that.

＜レナ島愚人の辞書にある通り

東魚

The Island of St. Helena,—

Just as it says

In stupid people's dictionaries.

Tôkyo

Napoleon once said that the word "impossible" was not in his dictionary. Many years after, he was banished to St. Helena where he must have realised that the word "impossible" should have been in his own dictionary as it was in that of common, foolish people.

肩車親爺の帽を子が被り

五 健

Riding on his shoulder,

The boy

Puts on his father's hat.

Goken

This senryu is mostly sugar. It may be noted, however, that the little boy puts on his father's hat from necessity or convenience, not from choice or desire to appear comical. Also, the father is extremely uncomfortable.

応援の中に彼女のコンバクト

鮎 美

In the cheering throng,

the girl

With her compact. Ayumi

Everybody is intent on the race, which is at its crisis. At this moment a girl is powdering her nose.

× × ×

られている連中が悲壯感に酔っているのかも知れない。

次に之等の他にワシントン記念碑がある。石作りの塔としては世界最高のものとして有名で、此の塔を開んでアメリカの国旗が開閉に立てられており、此の上からはワシントン市街が一望に眺められるとの事である。通天閣の開閉に日の丸が立っている事を想像して見たら何だか変な気がした。公共の建物では屢々国旗を見る事が出来るし、学会等には必ず立っている。早く日本でも方々に国旗が立つ日が来れば良い

国旗さえ誇らしそうにひるがえり  
その次に忘れられないのはリンカーン記念館である。これはアメリカ建国の記念館で我が国の伊勢神宮が橿原神宮とも云えるかもしれない。大理石の階段を上っても左程荘厳さはないが、此のリンカーンの巨像がアメリカ民主主義のバックボーンになっている事は事実である。「人民の為の人民の政治」これは不朽の名言である。「党の為の暴力による政治」の国では通らないかも知れないが、確かに終戦後日本人は軟体動物になった事は確かである。巨像の眼は



## 羽田を発って

—アメリカ通信—

足 立 春 雄

## 第五信

ワシントンにて

ワシントンは合衆国の首都である事は御承知の通りで議事堂のあるキャピトルの丘を中心に合衆国の州名を取って名付られた放射線状の大通りと碁盤の目の様にぎざぎざした通りとから出来ており諸所に緑の濃い広場がある。東西に走る通りは数字で、南北に走る通りはアルファベット順に呼ばれているので便利である。例えば自分の居るホテルは 15th であるし、日航の事務所は 15th とにあると云った風である。いく

ら賽の目でも旅行者には判らぬのだから東京や大阪が一日や二日の滞在で判らぬのも

当然である。所謂アメリカ式の高層建築は少なく反って街に奥床しさを与えている様である。ジョージ・ワシントン大学で引きとめられたり、ボイス・オブ・アメリカで日本向放送の録音を頼まれたりして市街の見物は出して出来なかった。放送局の人達によれば外国旅行中の代議士は必らず寄って放送させると強要するそうであるが、何とか理由をつけてお断りするとの事である。中には用事もないのに要人と面会せろというのもあるそうで、ハーターと列んで写真を取るのが目的であるそうだ。僕達もそうならない様に注意しなければならな

いと思う。

アメリカに来てても売名忘れぬ

「ヴォイス・オブ・アメリカ」(Voice of America)で日本の皆様の要を乞い」議事

浮世絵も他国でもており  
ヘロシイゲをアメリカで見る阿呆らしさ

此の辺で自己の脚元を見直す必要がある。世界の半分を歩いて見て世紀末的な焦燥感にかられているのは、日本が一番の様な気がする。全学連さんもう少し余裕を持ち給え、或はその指導者や〇〇党△△党の指導者は案外そうでもないのに、引きず

生々として大きい。

大目玉むいてリンカーン睨んどり

此の目玉つぶれるまでの民主主義

此所から郊外のアーリントン墓地に向う途中日本の桜で名高いポトマック公園を通って、池の畔の桜が満開となり朝海大使や多くの日本人が集まる姿を想像しながら外交はかくあるべきであると痛感させられた。アーリントン記念橋と云う橋を渡るのが無名戦士の眠る国立墓地の入口としては印象的な橋であった。

此所から遙かにベントゴンや硫黄島記念碑も望む事が出来る。墓地は広大で、やはり階級によって墓石の大小があるのは少し奇異に感じられた。ダレス長官も此所に眠っているそうであるし、日本の二世も多く此所に眠っているとの事である。

死んでまで大小のある面白さ

墓石も大小がありアーリントン

これだけでワシントンの印象を残して、ニューヨークへの旅に出る。

## 第六信

### ニューヨーク

アメリカ大陸の大半の旅を終ってニューヨークに着いた。地下鉄の中で五十数カ国語が話されていると云われるだけに国際的な都会である。道が違うので判らなかつた事であるがニューヨークは街のど真中にまで四万噸以上の世界の豪華船が横着けに出る大きな港街である。市の中心はカクテルで名前の知られているマンハッタン区であり、周囲はハドソン河によって囲まれて

おり、言わば一つの大きな中の島で、サークラインと言う遊覧船に乗って一周する事も出来る。或る程御自慢の高層建築物が林立しているが、之はニューヨークの地盤が岩石であるので良いのだそうである。従って地下鉄も随分下を走っており乗換にエリグエーターを使う所もある位である。但しこれは昔は各地下鉄が独立している私企業であったのを市が統合した結果である。

本当の地下鉄と云うエレグエーター

だが街は余り美しいとは云えない。人と車の多いのと、ごみごみしている所は東京とそっくりである。少し目を細くして上を見ると建物が高いけれど下の方を見ている限り車に乗っていても東京を走っている様な気がする。

東京ではなかった ニグロが多すぎた

フィダーをはみだすビルが立ち並び

ビル丈が高いが異ったニューヨーク

ニューヨークだと云ってインフエリオリ・コンプレックスを持つ必要はなく、御多聞に洩れずニューヨークには日本人が多い。ブロードウェイを歩いても必ず一人や二人の日本人に会う事が出来る。或晩川崎汽船の日に案内されて日本料理店に入っている。メニエがローマ字で書いてある火の通い何でもある。刺身を注文すればトロか赤身かと問ひ返されるし、「そば」を注文すれば「茶そば」か普通の「そば」と来る。勿論奴ドックもあればケツネウドンも出来るという具合である。コロン

ビア大学の近くの男女の留學生が結構ワイワイやっている。

ニューヨークと云うの山かけ食われる

又ニューヨークには日本人経営の土産物店が三軒ある。日本の旅行者に会いたければ其所へ行けば必ず会える云う位で、押すな押すな満員である。在留邦人も日本語が使えるので専ら利用していると云う事である。主人の話では日本の新興宗教の教祖様と云うのが二三人も大名旅行でお越しになって、沢山の買物をなさったらしい。勿論横文字の読めそうな方はなかったのに何所かの大学の心理学の教授と論争して来たと言々と話していたと言う事である。例の踊る宗教の教祖様もマンハッタン広場かどこかで踊って帰って行ったそうである。さすが教祖様である。

論争はバントマイムで済して来世界人と並んだ丈の世界人

### ボストン

ボストンは京都と姉妹都市と云われる丈に京都を思い出す様な静かな街で、例のハーバート大学やらマサセッツ工業大学等学問の街である。ニューイングランドの呼称があるが全くヨーロッパ風な占めかしい建築物のある街で従ってニューヨークと異って、非常に落ち着いた親しみ易い街である。専ら大学や美術館の見学に日を過ごし、一日を四十五哩程離れたウースター研究所の見学に使った。ホルモンに關して世界的の研究所であるが、非常に小じんまりしたアメリカ風でない研究所であった。中の施設はさすがと思わしめるものも少なくなかった。知的人的資源として多くの日本の学者が働いている。

### 飛・燕・往・来

★並木東田様氏 ホノルル市より

一 藤乃宛

先達て東京の田島金次郎さんから、手紙の中でこんなことを書いてきました。

女流作句「金泥集」に大いなる興味と期待をもっているのです。と申しますのは、

昔の川柳発生以来作者と云う作者は男性ばかりで、つまり男性から見たものばかりの川柳ですが、現代殊にアメリカ的女性が思い切つて、男性への抗議、遺恨百年の短刀を揮つてもらいたい、と私は期待するものがあります。麻生霞乃夫人その一党は、も

っとスペースを取って、女性ならではの言えないという句が欲しいと思います。落語家の柳橋の弟子に笑橋という女性の落語家があります。女性の落語家は初めての初高座の宣言に曰く「女ならではの観察をと」大きなマクラ言葉で堂々スタートいたしました。私は今後の笑話女史の大いなる活躍を期待するものであります。以上は金さんの名セリフでございます。

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊（五〇枚綴）三〇円  
送料（一冊分）八円

# 南紀一泊

路郎夫妻、合意アート夫妻が八月三日南紀に親子アベック旅行をされた。それを芭乃史とアートさんに対談してもらった。(編集局)



越の湯に落ちついた路郎主幹(アート撮影)

麻生 芭乃  
麻生 アート

芭乃 わたしの記憶  
しているのでは、家  
族連れで行ったのは  
お弁当持ちで玉手山  
へ行ったことぐらい  
やね……

アート そう云えば、  
川柳会やったか、高  
野山へ行ったね。

芭乃 あれば団体やった。  
アート 団体でもあの時は一泊した  
ね。何時頃やったかなあ。

芭乃 三十年位になる。大体わた  
しはものぐさで、旅行は一寸でも  
自分が歩かんなんので、一寸も  
労働をせいでいい楽しみが好き  
やった。七八才の時分から部屋は  
週一遍位はきつと行ってた。今で  
も昔あった古娘連と云うような年  
寄りの組見があったら何時でもは  
いりたと思うてます。でも年を  
とると温泉も一寸よいもので、こ  
とに夏になったら、朝から晩まで  
風呂の中で出たり入ったりしてい  
たいと思う。

昔の私の句に  
屋の風呂いっそあひるで居りま  
しよか  
と云うのはこう云う気持ちで生れた  
のです。

アート そう云えば僕も風呂は好き  
やね。夢声の「トロンボン夫婦」  
と云う短篇のユーモア小説を読ん  
でその主人公がやはり風呂好きで  
狭い土間に古道具屋で買ってきた  
桶風呂を据えて得意がっているの  
があったが、僕も大人になったら  
家までよう建てんけど(笑)玄  
関と風呂位こさえたいなと思う  
てた。

芭乃 土間の風呂位やったら何時  
でも出来るがな。

アート こんなルンペン根性は今だ  
にぬけない。だから旅行して知ら  
んとこを見たりするのは嫌いでは  
ないんやけど、出来るだけ道中の  
時間や経済の軽いところでフルに楽  
しみたと思う。まあ人間の楽し  
みなんて、どんなささやかな暮し  
の中にも見出だせるんじゃないか



## 輝やく巨歩 (2)

創刊号から  
四百号まで

★ ★ ★

昭和六年

地下鉄欄新設 一月

火華欄(誌上匿名)新設 一月

川柳雑誌社基金募集 一月

客員小出恒重氏死去。二月十三  
日

本社事務所の町名番地変更。

(三月大阪市住吉区平野西之町  
八三番地)

阪大川柳会発足 七月二十五日

朝日新聞八月三日付け天声人語

で川柳雑誌を好評。

動物句会 八月八日天王寺動物  
園で開催。

石曾根民郎社友に。十月

昭和七年

芭乃女史本社新春句会で初講演

日本柳壇百人選 一月号に掲載  
(以後省略)

関東川柳函歡迎句会 四月三日  
芳雲寺で。

百号記念特集号 五月一日発行

百号当時の編集局員 麻生芭乃、  
伊藤愚陀、橋本緑雨、安井ひろし、  
山本丹路、松丘町二、松盛琴人、

福田山雨楼、安西杏三、住田乱耽

川柳社会化運動の尖端 「川柳  
の夕」は五月四日午後七時から朝  
日会館で開催。

創刊百号記念句会 五月二十日  
ちとせ倶楽部で開催。

路郎主幹嬢川支部創立五周年記  
念川柳大会(五月八日出雲今市紙  
屋旅館)へ出席。

武玉川研究 六月号から連載。

以後十二年間に亘る逐一句評。梅  
本秋の屋、森東魚、蛭子省二の諸  
氏担当。

路郎主幹百号記念京都支部加茂  
川句会(六月四日昭和図書館)へ  
出席。

路郎主幹「関西柳壇」(関西日  
報社)の讀者に。

聖駕奉迎句会 十一月四日ちと  
せ倶楽部で開催。

伊藤愚陀近く。十二月二十七日

昭和八年

創立十周年記念特集号 一月一  
日発行。

創刊十周年祝賀川柳大会 一月

な。昔の僕の句に

ルンペンに車にSのイニシアル  
これで結構ルンペンは楽しんで  
いるのだと思う。なんやえらい理  
屈っぽくなった。お母ちゃん、こん  
どは風呂は何回位はいった？

葎 行った時と、夜中と、  
朝と。

ア ああ風呂の写真は駄  
目やったけど、鯉か金魚を  
浮かしたらいいような……

葎 丁度庭の真中の泉水  
みたいやな。岩風呂の方が  
温泉らしかったね。

ア 然し一遍行ったらま  
た行ってもいいと思うけど、  
行くより向うから来てくれ  
んかと思ふ(笑聲)

葎 風呂を持てね(笑聲)

ア まあ勝浦位がええとこやね  
もうあれ以上遠いとこは御免や。

葎 新宮から那智へ行く道の左  
側がよかった。

ア 勝浦では？

葎 廊下に蟹が這うてた位なも  
のやね。(笑聲) 翠青色の海がよ  
かった。

ア 朝起きて船が出たり入った  
りするのがいい。

葎 それかて乗れへんのや(笑  
聲)

ア まあ似たようなもんや、向  
うが動いてるか、こっちが動い  
てるかの違いやから。

葎 こちから見た方が全景が  
見えていいかも知れん。

ア 呑んではかりいたじやない  
か。そやから、わざわざ遠いとこ  
へ行かんでも、何処へ行っても同  
じことやね。僕らみたいな人間は  
かりやたら観光協会潰れてしま



貸浴衣に寛ろいだ葎乃女史と静子さん

## 勝浦にて

葎 乃

磯の香に名残りを惜しむ雨戸閉め  
夜となれば人魚のなげく岩もあろ  
岩風呂へ廊下を蟹と歩く也  
内海が湖水と見える鮎の皿  
貸浴衣舞踊好みの柄もそえ  
嫁の世話になって干される肌襦袢  
海の碧さがトンネルにちよんざられ  
崖下へ降りるアマチユアホトクワア  
ハイウエイ狭いながらも海に沿い  
伝説を車降りずに読むとし

アート

浪白く岬の裾のレーニなれ  
旅の夜あんなところから月が出た  
眠て喰べて浴って乗って戻る母  
那智の滝そこらに基石落ちていず  
観光客くらげの如く流れ来て  
石段を仰ぎ見て観光引返し  
だんらんの父はダンスを見に出かけ  
湯煙の中でモデルはのぼせたり  
羨ましく息子へポーズ作る父

(想思筆記)

パイオリスのアート氏



宿の崖下の海に親しむ

十五日道頓堀俱樂部で開催。

柳壇画報 柳誌企画の新機軸、  
画報二頁を八月号から巻頭に新設  
川柳パイロット欄(初心者指  
導) 九月号から新設 福田山雨樓  
担当

玉造支部発足 西田卿榮・清水  
白柳子の肝煎りで。八月。創立句  
会は九月十日。

本社十周年記念東京句会 十月  
五日午後五時半から東京浅草雷門  
前並木俱樂部で開催。

東京句会記念号 十一月一日発  
行。

植物句会 十一月三日天王寺公  
園で。

本社社章制定。

昭和九年  
路郎主幹一月十四日大鉄支部創  
立句会へ。

路郎主幹三月九日鮮満地方への  
川柳行脚へ。

路郎主幹四月二日川柳きやり吟  
社十五周年大会へ出席のため東上  
夜桜と動物句会 四月十四日天  
王寺動物園で開催。

路郎主幹四月二十二日本社四国  
支部連合川柳大会へ出席。

川柳二十日会生る 七月から路  
郎主幹宅で。

路郎主幹 六月二十四日番傘の  
岸本水府氏らと大阪中央放送局第  
二放送から川柳の披露と合評を放

送。

本社事務所移転 大阪市天王寺  
区上汐町一丁目五一番地へ。

関西風木害慰問句会 十月五日  
道頓堀俱樂部で。

昭和十年  
日本名所名物川柳 二月号から  
掲載。

明治以後の川柳年表 三日号か  
ら連載。西島〇九氏執筆。

本旺会創設。

観心寺吟行 四月二十九日  
路郎杯の設置 六月  
川柳指導講座 七月号から連載  
川上三太郎氏指導。

川柳雑誌社東京支社及び支社長  
を設置 初代支社長に福田山雨樓  
氏就任。

(橋高薫風子)

## 楓の天国へ

趣味の集りに、吟行に、御  
宴に、御家族連れれの御清  
遊に御越し下さい。  
本格式日本料理  
味は一流値は三流  
紅葉の名所竜田大橋下車  
半丁どやまのふもと  
詠田川畔

本  
つる  
や

申込み受付 電話竜田一六二  
大阪連絡所(天王寺)  
九六五六番  
竹荘・竹青へ



# 上から下まで

東野大八

私たちの緑な頭脳労働者は、理髪屋のサービスに対していろいろと注文の多いのをつねとする。たとえばあつい湯を頭の裏側からイキナリじゃあーとかけられると亀の子のように首がすくむ。洗髪にしてもこのころはやりの、ビニール製の硬いフケ落しでただでさえ生地むき出しの頭の地肌をガリガリと薄薄にやられたのでは、あとで熱くなった中味のよりを戻すのに随分骨を折る。ハデ、脳という字は月へんだったかな、ととさの判断がつかなかったりする。そこで、さる店では洗髪の小僧さんにヤワラカーク、ヤワラカークというので教育した。おかげでこの頃ではビニールの前カケを首につけながらその小僧さんヤワラカーク、ヤワラカークネ、というようになつた。常連で有難いのは何もゆきつけのみやただけではなさそうだ。

このときはど男女の差異を力学的に至極ハッキリと感得する時はない。佐藤弘人の御存知随筆によるとこういう点についてこんなことが書いてある。「男でも女でも重いものを持ち運んだり、力業をするときは口を堅く結んで力の逃げないようにする。口をボカンとあけて力仕事をするバカはない。女は口を結んで力を入れることは男と同じだが、体部の下の口から気が抜けるから力もぬける。随つて女は男より力が入らぬ」といかにも理學博士らしい言い分である。「すりこぎのタギは女にちやうどよし」という古川柳があるが、まことにいい得て妙である。名古屋の新聞人の古老佐藤殿老は、この点についてこう解釈されたことである。女とは、かのとき、男にまつわりつくその力の強さに時にはおどろかされるのだが、これはその弘人説にピッタリである。すなはち男によって下がツマツまっているので力がぬけないか

らだという。だから床屋の場合はそのムスメにしっかりと洗ってもらうにはユビでもそこにつめてふさいでおけばよろしい、どうせその場合、こちらの両手は遊んでるんだから、とにかくモノは有効に使うべきだーとね。

◆ そのような話についてもう一つ。女房が幾度かに一度はシリをむけて「情勢」に応じない冷たいときがあるが、この点についても彼はいう。こういう非情勢は、大てい便秘してツラの口がつかまつている場合が多い。女体の便秘はすぐそのお隣の口を不快なものにする生理があるから、その点についてナニガシかの不満のあるご亭主は、そのよってなすユエンをよく認識して、ツンと野菜を与えるべきだ。野菜は通じをよくするからね、とある。ナルホド裏口でツメていくのは木戸と将棋ぐらいのものだ。

◆ 女の口といえは貝に通じるけれども、いい年頃でこれに縁のないのをむかしは「カイ性なし」とわらわれた。こういえばゲスっぽくなるけれども、貝ほど尊いものはないのである。東洋の太古の貨幣価値はすべて貝にあった。その点をガクのある学者（モットモな話だが）漢字制限でもこの文字だけは大幅にその制限のワクをゆるめている。貴、財、貨、貯、質、売、費、貢、質、賄、資、質、質、賞などみんな財物やカネに縁がある。このつなぎ合せを分けてしまふと貧となり。貝を貰くところが母の貝であり、これの浅いのを賤しいという。貝とは何か、この処分の判断に賢明なる女性を貞女という。貝をボクすればすなはち貞なり、と儒教にあるそう。ボクしそこねてよろめいたものこれすなはち不貞となる。もつとも彼女をして不貞ならしむる責任はフティなる男性の側にあるのだが……。

◆ 昨年の伊勢湾台風やこのほどの当地の集中豪雨で、一番よくヤラれたのがニワトリだが、漢法医の大家寺田文治郎博士（私の大陸時代の旧知）の書かれたものによると、水におぼれた生物の蘇生にはカマドの下灰が一等よろしいとある。この灰は水湿を奪う。水におぼれたものに神効あり。カマドの灰を一斗あまりとりおぼれた人の頭より足に至らしめれば、体中の水七孔よりたちまち出づとある水におちて二、三時間後の死んだニワトリを目とクチバシだけを出して灰に埋めたら生きかえったとも記してある。よく家の相續争いに「カマドの下灰まで私のもの」というのが口説にあるが、どうやら、この語源の意味が正しいとこの辺にあるのではなからうか。ささやかなるモノゴトの表現もむかしものとなるといい加減なものではなさそう。

◆ 灰といえはこんなむかし話がある。若い男が殺された。どうやら痴情の果らしいのだがホシがつか

**胃潰瘍を  
内服でなおす**

潰瘍の創面に直接働いてニツシエに肉芽を盛り新しい粘膜を新生させ且つ副作用は全然なく胃痛を迅速に和らげます。一回四錠ずつ一日三〜六回使用致します。

**メサフィリン**

錠 一〇〇錠  
五〇錠

七〇〇円  
三八〇円

エーザイ株式会社

## 短詩文学

## 秋の作品展

(第四回)

会場 大阪梅田阪神百貨店二階

丸善画廊(電話二七八七番)

会期 11月24日(木)——29日(火)六日間

午前十一時から午後八時まで。

作品 詩・短歌・俳句・川柳作家新揮毫作品

(半折・横物・色紙・短冊陶器その他)

頒 価 売約に応じます。会場係に御申し出く

ださい。

(作品搬入は十一月二十三日午後三時から会場で行い扱います。なお出品数、品名は十一月十日までに連盟事務局までお知らせ願います。軸は本表装のこと、色紙、短冊は色紙掛、短冊掛をご用意願います。)

盟会社 連員 学委誌 文育雑 詩教柳 短市柳 西阪川 関大川 主催 後援

## 大阪市民文化祭行事(短詩文学関係)

恒例の行事を左の通り開催いたします。詳細は各新聞社並びに各福祉団体の予告及び連盟の案内等により、承引の上、市民文化興隆のため趣意の協力をお願い申し上げます。

第十三回 川柳大会 十月二日(日)一時

会場 毎日新聞大阪本社講堂

第九回 短歌大会 十月十六日(日)一時半

会場 毎日新聞大阪本社講堂

第八回 俳句大会 十月廿三日(日)一時半

会場 朝日新聞大阪本社講堂

主催 大阪・大阪府・大阪市・連盟 後援 毎日新聞 朝日新聞 大阪府連盟 大阪府連盟 大阪府連盟 大阪府連盟

めない。困った町方与力が思い余って大岡越前守に相談した。ご存知の通りのこの名奉行は話の首尾をきいて八十の婆さんを捕えた。案の定このお婆さんが犯人だった。さすがは大岡さまと感心しながらその目ききのほどをきいたらこの人、ナツ一筋を火に焼いてみせた。そして、見られよ、このナツは黒いナツの形で灰になっている。八十の婆とて女に変わりはない、と説明したという。このミステリーの真髓は、女は灰になるまで業の深い女体の因縁すくをもっているというわけだ。アナおそろしきことのハかな。

◇ 女人ばかりを話のタネにするのも恐縮なので男の側にも公平にふ

れておく必要がある。新京都で私の住んでいた劇場が丸焼けになった。住居難で劇場の薬屋を下宿としていたわけだ。キレイに跡形もないその現場に立ったとき一個の死体がそこに転っていた。ニワトリの丸焼きみたいに見事に火が通って乾いた土偶を転がしたような具合だったが、仰向いたおなかの上に、ナマ焼のソーセージみたいなのが一個所存なさそうにちぢかんで乗っていた。一見してそれはまぎれもなく男性の象徴である。フムと居合せた連中がうなりながらいとも厳肅なる顔を誰ともなしに見合せたことだった。よほどモノがよくって灰になるまで火力がもたなかったのだろうか、とにかく強ジンな生物のシンの強さ

## 動かぬ字句を

★★★

に「ヘキエキしたことを今もありありとその物体の形状とともに私は忘れ得ない。こんな話をついこの間も仲間にしたことだが、女ならさしずめこうなると何が残るだろう。ということになった。すると一人が即座に確信をもってこう答えた。「そりや、口の中の舌だろう、彼女は死ぬまでこれを使いぬいているからね」

文字」を追求し、ために徹宵することしばしばと聞かされ、ほくなくどまったく赤面ものであった。ある席上でこの話をした今東光氏ですら感心されていたが、この文豪にしてこの熱意を活字にしてこそ不滅の文学が遺るのである。数百枚の原稿に「絶対に動かぬ文章」の連続となると、これはなかなかコトである。われわれの雑文とは世界も舞台もちがうが、こんなワザはできっこないけど、せめて、そういう心がけでも持ちたいと思っている。

「川柳塔」の切が必ずに迫まると、あわてて十句モノするほくなどは例外として。わずかに十七音の文字に、動かぬ字句を追求するのは当りまえのようにおもふ。それには今日使っている字句で、しかも明日へと「いのち」のつづくものであるこというまでもないがこれには日ごろの精進が重要さである。 (不二田一三夫)

先日直木賞作家邱永漢氏の講演を聴いたが、日本人が一番よく使うことばは、天気の良いさつたさうだ。ちよつと日本人では気がつかぬ事でおもしろいと思った。 「今日はよいお天気だ」というのから話が進む日本人の、これは儀礼の動かぬ「言葉」とでもいうのであろう。





アンテナをたてアンテナの数を読み クイズ解くときの執念深い妻 岸和田市	同	田端くにお	夏やせもせず秋を迎える恐しさ 西宮市	同	末沢 花美
割勘にしようと彼女にリードされ 仲人にたで喰う虫を依頼する	同	同	親の威光か私にすぎたお世辞聞く 茄子漬けの色へ食欲らしきもの 高校野球入場式	同	同
出来ぬ子の姉がきれいな参観日 易に凝る母に男のような過去	同	同	いざ戦わめやも足どりのたくましく 一べんは遊びに来いが来てあわて 岡山県	同	同
良縁も金の工面に身が細り 枚方市	同	草深 酔舛	タンタン タンタン タン 腕は怪しい釣天狗	同	同
香典の役にも立たぬ百円貨 軽う金儲ける人の目の光り	同	同	同窓会神経痛の師を囲み 重思を乗せオーライで動き出し	同	同
軽犯罪すれすれのとこで着る暑さ サンガラスとればほんとの女なり	同	同	今食べた西瓜が汗になる暑さ 宇都市	同	同
夕映えのように四十の胸もえる 大和五条市	同	尾来 絵見	口紅を又も副食費へ食われ 歩み寄りたい女房へ子を這わせ	同	同
雲はもう秋の色なり逢えぬ人 男五十寝冷え案じる母があり	同	同	笛吹けば踊る阿呆がいて楽し 凡人の自覚女房にさからわず 兵庫縣	同	同
母さんの素顔がいつも好きという 雑用に追われテレビを子にまかせ 京都府	同	塚脇 笑太	塩壺に塩充ちてあり主婦の幸 胸算をしながら酒の味気なし	同	同
金ですむ話で聞くのを止めておき ほめられて手に乗らぬ子に育ち 自惚れもあって生きるに張り 出来	同	同	智恵も借り手も借りやうしが巻け 浮気した気持で帰るヌード展 山口縣	同	同
弟子の汗師匠の汗へすだれ巻く 大阪市	同	板東千代美	大水の後で町費の酒に酔い 泥沼にいて香水がはなされず	同	同
足音があまり似ていて腹がたち 香水の匂いを変えて見る暑さ	同	同	先代からの漬物石にある丸み 貝塚市	同	同
丸尾潮花さんへ	同	同	ひまわりが一層背伸びをする暑さ 絶安へ思考力空転する暑さ	同	同
舞扇もてば綺麗な瞳にもどり	同	同	口笛を吹く嫁封建性破り 愛媛県	同	同

(四)(五) 明治27年5月18日(六)  
敦賀市(七) 無職(八) なし(九)  
今昔の思い出の丸ひるがえり

(一〇) 将棋・麻雀・生花・俳句  
(一一) 有(一二) 明治十二年五月

(17) 正木龍樹  
まさきりゅう  
(一) 正木準章(蕨改名)(二)  
竜樹(三) 柳建寺(四) 石川  
県金沢市大豆田町六七(五) 明治  
21年12月27日(六) 神奈川県横須  
賀市(七) 元官吏・僧侶(八) な  
し(九) 正れもまたでうそつき  
れになり(一〇) 南画(一一) 有  
(一二) 明治卅六年夏・中学に入  
学した年

(18) 石川葉郎  
いしかわすすむ  
(一) 石川捨次郎(二) 葉郎(三)  
なし(四) 明石市成願寺市住二六  
〇号(五) 明治30年5月8日(六)  
神戸市(七) 無職(八) なし(九)  
さみしくて健闘の艶をみがく

心斎橋筋大丸前  
電話の三三四四番

福寿司



短大出大学ではと云い馴れて	伊丹市	小川静観堂
子の宿題手伝う鉢巻板につき	同	同
僕んと何を何しても壁ばかり	同	同
二十四貼って子供のことはかり	貝塚市	護川 梢月
カーテンが風に押されて恋が見え	同	同
小遣いはみんな果物屋にとられ	同	同
平和への努力それみよ鳩がとび	大阪市	叶岡 史風
退き際を知らぬ男がよくしゃべり	同	同
金になるポスト成程金になり	同	同
お互いの歳はきくまい嫁き遅れ	和歌山県	木下 一休
氷柱の陰でたしなむハイボール	同	同
姉女房団扇で愛の風もくれ	同	同
退院のいの一番は恋と逢い	大阪市	竹内花代子
猫だけが日向に寝てるのも残暑	同	同
三味線を夫婦で弾いている若さ	同	同
あの頃の恋が入れ歯を洗ってる	鳥取県	鈴木村諷子
ボーリングせねば動かぬ年になり	同	同
女房が浮かれりや浮かれる男なり	同	同
ダンジリより海山へと気が揃い	堺市	沢田 美喜
父の代筆淋しく引き受ける	同	同
青すだれ昼寝をカバーして貰い	同	同
一人では淋しかろうと他人の目	松江市	田中 妖人

ゾロゾロゾロ街に男が湧くと夜	同	同
スタンドを消し良心をねじ伏せる	同	同
終戦十五年一句	同	同
五万円の扶助料今はけなるがり	兵庫県	河原みのる
稼ぎ場へ乞食も自転車を通い	同	同
男みんな狼にされ夏の宵	同	同
先代の苦勞と別なゴルフ焼け	京都市	大久保和三郎
七転びなりで八起きは子に任し	同	同
ズボン少しずらせ借りたモーニング	竹原市	杉原 愛場
入口を半分あけて公休日	同	同
旺盛な生活力の紅の濃さ	大洲市	横田 放人
髪結うて女おんなを意識する	同	同
会えばすぐ仲人が聞く夫婦仲	岡山県	福田 祥男
扇風機とめさせて服む粉薬	同	同
料理見学無料ジュースでもてなされ	倉敷市	小倉美音子
レース編仕上げへ既に秋の風	同	同
サンガラス有料道路突っ走り	大阪市	本多 清人
お渡りをテレビで見れる世がわり	同	同
役得は紙幣をさらのと換えるだけ	京都市	都倉 求女
レースは手がしぐさの紙幣を出し	同	同
殺し屋のスタイルも居る待ち呆け	羽曳野市	坂東あき
みつ蜂の如くのれんに入れる首	同	同
よく喋べる女歯痛で社を休み	大阪市	福井 竜昭
大掃除妻は口先だけ動き	同	同

(一〇) 読書・開基(一一) 有	
(一二) 昭和六年四月	
(一三) 池田可宵	
(一四) 池田正雄(二) 可宵(三)	
(一五) 長崎市新大工町五(五)	
明治34年11月10日(六) 山口県下	
松市(七) 衣料品商(八) 〇六九	
二七(九) 御健闘いのると地盤荒	
しに來 (一〇) 郷土観光開発事	
業(一一) 有(一二) 大正九年一	
月	
(二〇) 後藤閑人	
(二一) 後藤正二(二) 閑人(三)	
なし(四) 仙台市東八番丁一七〇	
(五) 大正2年3月28日(六) 仙	
台市(七) 建設業(八) 〇九七九	
五(九) 身のほどは五尺十三貫五	
百(一〇) 特になし(一一) 有	
(一二) 昭和六年	
(二一) 星埜兄兄	
(二二) 河村豊(二) 星埜兄兄	
(二三) なし(四) 愛知県津島市永	
楽町一丁目五一(五) 明治32年1	
月14日(六) 名古屋市中区正木町	
間の森地内(七) 印刷彫刻業(八)	
津島局三六九〇(九) 御主人も大	
事わが身も又大事(一〇) 妻連れ	
ての旅・釣(一一) 有(一二)	
大正十五年十二月仔細あって俳句	
より転向。	



キャンデーを配り子供会の盆踊り 貝塚市

辰巳忠太朗

医者に顔知られ療養 長くなり

同

景品は女物でくるゴルフ 岡山県

榎原 万女

経済が持てぬとテレビ料理見ず

同

蠅たたき握ったままの昼寝 かな 和泉市

末田 晃康

片影へ右側左側もない暑さ

同

アパートでくらすと決まるとで折れ 羽曳野市

見本 泉洋

良縁へ捨てるに惜しい芸を云い

同

嫌われることは承知で念を押す 竹原市

山内 静水

ひったくるように結局もってあげ

同

秀才の家系へ足らんのも混り 大阪府

高橋 尚史

課長になって

こせつかぬようにと思いう盲判

同

ゴルフ場のケタの広さが美しい 兵庫縣

遠山 可住

一人でも女は隅で湯を流し

同

甘やかして呉れなと孫の父の文 芦屋市

里田 一十

お薄が出ると聞いて若輩尻込みし

同

資金カンパみんな旅費にされ 笠岡市

松本 忠三

香簀返し葉書で暑中御見舞

同

すくすくと特価ずくめの子が育ち 八尾市

吉田 博一

知った歌唄い尽して酔っぱらい

同

子に勉強させてパチンコ屋へ出せ 見島市

伊丹柳瓢子

ささやかな貯蓄銀行のカレンダー

同

又ブレスかいな隣りのテレビ 倉敷市

藤岡 萌芽

婦人大臣妻の鼻息荒くなり

同

ボロシで来た上役へ洒落が云え 錦鹿市

吉田 俊和

恩給がもうつきました花バサミ

同

全盛の過去には触れず鉄を振り 須崎市

高橋 蟠蛇

アベックで金の要らない夕涼み

同

繃帯の手を高々と満員車 大阪府

中西兼治郎

結納がすみ新調の続く幸

同

秋うれし誰かの病気なおす風 枚方市

郷原まき子

テレビは聴くだけのもの女中部屋

同

割り切った心迷わす夏だより 西宮市

三上 芙路

偶然の出会い喜ぶのも女

同

結局は金なりいやな日が続く 岡山県

杉本たつよ

ボーナスは飛んだがバリッとした背広

同

子の欠伸母の欠伸のうつる午後 大阪府

藤村百合恵

オートバイ腕一本はほる気で居

同

旧知来る日庭の西瓜を確める 奈良市

内海 敬太

岡本庄作先生追悼

死なれんと云った師の顔浮んで来

同

冷房の装置確かめ映画見る 七尾市

松高 秀峯

人並みの暮らしがしたいお中元

同

女房のやりそうなことマネービル 大阪府

佐伯 九紫

四十づら下げて府営へ申し込み

同

オートメの下請けをして一家食 兵庫縣

常岡 孝風

貧乏をしても愉快な綴方

同

(22) 柴田 午郎

(一) 柴田午郎(二) 午郎(三)

なし(四) 島根県能義郡伯太町母

里(五) 明治39年4月28日(六)

現生所に同じ(七) なし(八) 母

里局六番(九) 夕日は赤くともお

もつこと一つ(一〇) なし(一一)

有(一二) 昭和二年八月

(23) 川村 好郎

(一) 川村好郎(二) 好郎(三)

なし(四) 大阪府東北郡高石町北

四六五(五) 明治35年10月25日

(六) 大阪市(七) 会社員(八)

堺(九) 五七六五(九) 五十やと親

のすべてがありがたく(一〇) 別

に無し(一一) 有(一二) 昭和十

五年

ヒゲそり後に...

●美容衛生剤G11  
●アラントイン  
●水溶性ラノリン

配合

男性

200円

アストリゼン



カモフラージュする新聞をまじらげ 岡山県

蟬取りの一団去った蟬しぐれ

今更に帰化などわしには遅かった ホノルル市

州会は議員の増給から始め

食欲が出たに花束持つてくる 玉野市

幸福の絶頂ダムにボーズ取る 岡山県

釣銭をもらい忘れる程しゃべり 岡山県

はえ叩きはくろ叩いて叱られる

神棚の位置まで替えるホームバー 石川県

ふられたを忘れるジャンに負けどろし

海水着これが最後に母となる 大阪府

## 高野山にて

高野槇切り株一つ床に生け

嫁き遅れひとつは親のせいとされ 河内長野市

血圧が左うちわにもある悩み

黒髪の誇り婚期は逸しても 大洲市

反抗の髪赤々と染めてくる

山彦に恋する人の名をよばせ 松江市

儲かっているのか社長愛想よし 鳥取市

機械化をにくみ日傭い細く生き 笠岡市

味噌汁に娘の味の日曜日 福岡市

横車だけが居眠りせぬ会議 大洲市

どの窓もみな満員の汽車が着き 滋賀県

死に場所もあらうに親の行けぬ山 大阪府

ねころんで見れる花火に幸を知る 小松市

御無沙汰を笑顔で詫げる嫁を連れ 笠岡市

若柳花乃子

同

蓮池 風草

同

小谷 仙山

同

横山 一声

同

高山 清勝

同

山田 蛙水

同

同

加登章の介

同

村田 淑滋

同

持田二三子

近藤 昭夫

佐内 隆文

本村 喜代

富永 健朗

土守 蜻蛉

藤富 淀月

月田北海坊

守屋衣里子

外孫が来て家中をたからせる 河内長野市

沈黙を愛するように娘はだまり 大阪府

夏瘦せをからかって見る汗の玉 松江市

山彦もひるね山林学校もひるね 京大津市

押売りのように信仰すめに来 出雲市

肩書へ贈る拍手を聞きわけ 大阪府

うやむやに葬る汚職足を出し 五所川原市

忍術のように女房にへそくられ 宮崎市

愛人が半分切られている写真 大阪府

頼りない男と知って貢ぐ恋 香川県

和服を着賞めれば洋装で遊びに出 神戸市

豪商の手となり足となる政治 倉敷市

赤旗とアジビラに工場小さくなり 大阪府

貰い風呂呂が好きできらわれる 兵庫県

退院が医師の指示越す祝酒 布施市

帰郷して土産話は標準語 福岡市

御祭りが見えず人波見て帰り 布施市

本日休業街を他人の眼で眺め 高知市

陽焼けたことも嬉ぶ病後なり 西宮市

病む妻へ体温計は低く云い 新居浜市

お前に似僕に似ても子の音痴 西宮市

夫々の帯の柄にも似た心 玉島市

社長学ゴルフの手ほどき第一課 ホノルル市

失恋をいやすビールの気が抜けず 和歌山県

同情をあふるマスコミにも困り 愛媛県

栄養剤のんで暑さたたかわん 松江市

森本黒天子

橋本 裕邦

岡崎 雪美

高津 紡毛

森山 壮

西本 保夫

盛 竜蔵

野口卯之助

大塚喜代子

三井 酔夢

吉田 隆史

大須賀平々

本村 文福

斎藤たけお

坂上山椒坊

本村珍ちく

村上 光福

須藤 俊江

鶴飼 鮎子

加藤 向水

藤本 晴暉

井上 旭峯

並木東田楼

寺杣 花車

菊地喜与史

岡崎 祥月

味のてー

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 27 6684

御集会には階上御利用下さい



現代柳人録補遺

前号の分へ生年月日を追加します。

中島生々庵(明治31年7月2日)

武田北人(明治36年9月25日)

大野風柳(昭和3年1月6日)

山田菊人(明治42年1月5日)

岸田万彩郎(明治37年10月26日)

西尾 栗(明治42年3月6日)

山川阿茶(明治30年5月13日)

山田凌甲(大正11年10月8日)

後藤梅志(明治31年1月1日)

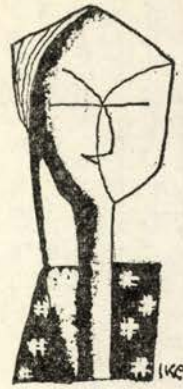
甲斐田桜里(明治27年12月22日)

大山竹二(明治41年2月14日)

北川純一朗(大正5年10月3日)

(担当・西川 晃)

## 句評リレー



岡山市  
京都府  
西宮市  
大阪市

武部香林  
田中烏雀  
河相すゝむ  
高鷺亜鈍

## 古稀の顔原価償却ふと思ひ

原人

香林―生涯の仕事の大半を成し遂げた老人に対しての、ナマの感情と「原価償却」という非情の術語とを結んでの着想は面白い。

古稀なる人の原価償却が終っているか否かは考える必要はなからう。「ふと思ひ」は誰でも一度使った見たがる、常套語であるが、とかく不成功の率が多い。然しこの句に於いては「ふと思ひ」によって、ユーモアが生れたのであつてまず成功だと思ふ。

烏雀―連想が面白かったと云ふこと。

なるほどそうもあろう。

奇抜な着想には、選者も引かかって、選抜しそうだ。

然しただその着想の奇抜なと云うだけで、人を長く引きつけておけるだろうか。殊に下五の表現が矢張り陳腐そのもので、この句を救われないものに、して仕舞っている。

すゝむ―古稀と原価償却と云う取り合せの奇抜を狙つたのならた

面白いと云うだけの事です。

「ふと思ひ」で実感の句として原価償却が生きています。ユーモアの句として上五の古稀の顔の「顔」が生ずる様に思いますが。

亜鈍―「原価償却」がかたよった用語である。会計、税理などの経済術語では通っているが、まだまだ一般庶民の口には上らない言葉だ。その言葉の説明となると、余計に六ヶしいし、経理、税法など経済学者達の学説が立つというものである。それが「古稀」という庶民の慣わしで昔も今も言われている言葉との比較。対立。衝突のしかたが鑑賞者の批判の対象となる。作者はこの二つの極端な言葉を撰択するには相当の用意をもつてしたことだろう。だがその言葉と結合するための努力が足りない。セメダインの代りに間に合せの御飯つぶでひつつけた安易性。烏雀氏は下五、すゝむ氏は顔にひつつかった所以である。だが案外作者の狙ひはそのような手を抜いたと見えるところに川柳のもつユーモアを漂わしたとも考えら

れるがどうだろうか。

香林―烏雀氏の云われる如く「長く引きつける」いわゆる深味という程のものはない。人間の清味もみられない表現の冷酷さはこの句を読むものの様に感じる所であるが、多かれ少なかれ、穿ちとか皮肉とか川柳のもつ冷たさはそれを超越して可笑味を誘発させ又心からの微笑も湧かせる。

下五は今更論を俟つ必要のない程、よく批判の対照とされたものであり、自分としても選評の上で説いて来たが、この句の両極端をつなぐには適当なセメダインの役割ではある。ただセメダインの風化しかけているに難点が残る。

烏雀―御飯つぶやセメダインが出て来て誠に面白い。二つのものを下五で繋ぐのであるから、ここが論点になる。香林氏のセメダインの風化はうまく云われた。風化の度合やつなぎの巧拙によって、句を生かしても死なしもする。原価償却の語の普遍性が、やや乏しいように云われるが、古稀の語も若い世代には耳なれぬ語となり

にけりではなからうか。何しろ天照大神が出る時代だから。要はセメダインの風化程度にある。ユーモアは異なった二つの比較の妙にあるので、「ふと」思ったことは重要でない。「ふと」は最早や弊りたが、ここでは替句が仲々見つからぬ。私ならばふとは潔ぎよく捨て、最後の「い」は「う」とする、そして繋ぎに「を」を入れようかなと思ふ。

すゝむ―皆さんの云われたこととつきていと思う。出来上って丁えは色々と考えられるが古稀に對して原価償却のことが浮んだその連想が此の句の面白さで、あれこれ考へてもつて来たものではない処にこの句のよさがあり「ふと思ひ」に余地はあるとしても、古稀、原価償却と云う固い言葉で軽いユーモアを出しておりこのままではないかと思ひます。

亜鈍―古稀の顔―ここは原価償却。原価償却―ここは古稀の顔。なんのことはない。これではトンチ教室ではないか。すゝむ氏のいう如く、ふと思ひついた連想だと、このようなトンチだけのことであつて、これ位の智慧なら右黒敬七でも即意珍答するだろう。その句にユーモアがあるとすれば、そのトンチにあるだけだ。つまり古稀の顔と、普通予想もつかない原価償却との連想。それは両方の言葉の表面だけの意味を結びつけたのであつて、そこに非情も冷酷も、川柳による穿ちもあり得ないというのが僕の正直な批判で

ある。

僕はこの句から引き出して、諸氏と共に一句主と読者とも一研究したかったのは、この異種ともみられた古稀と原価償却という言葉を川柳にする方法にあった。

古稀、原価償却では句にならない。そこで古稀の顔原価償却とした。これでも句にならない。そこでふと思ひ、とふと思つてつけたと解すべきか。これで一応川柳になった。(十七文字型にした川柳というのではない)ところで、初めすゝむ氏は「顔」を生ずるものと評し、烏雀氏は「陳腐そのもの」でこの句を救われないものにして「と非難した。私は間に合せの御飯つぶにし、香林氏は二回目では「セメダインが風化しかけてい」と難点を示した。結局二つの異なった概念の言葉を川柳にする方法に研究の余地が残されたということになるのである。それでは如何なる方法で川柳にするか、となると私は諸氏ほど実作者ではないから、具体的に云わずに、セメダインを要望したところが、烏雀氏は下五を訂正して、八古稀の顔原価償却を思ふとされた。これだと思ひつきとみた句意は是正されたが、顔はそのままである。元来がこの種の川柳は連想とか類推をぶら切った構成乃至は結合の仕方に主知を働かす可きものだ。その客観的な例は出せぬが、路郎師の主情的な句を味おう。

古稀はよし弟子にまご弟子ひ

まご弟子

(担当・真鍋一颯)

# 誌壽四百号記念

## 祝賀川柳大会

— 莊嚴と華麗の大絵巻 —

柳史に輝やく「川柳雑誌」の偉業

(記念事業の一)

昭和三十五年九月十一日

大阪府知事

左 藤 義 説

★ 本年もまた豊作だという、しかも記録的のみのりだそうである。この天地の恵みの中にわが「川柳雑誌」も、たわなに四百の誌齡を重ね、きょう昭和35年9月11日、ここにその祝賀の川柳大会を心斎橋大成閣楼上で花々しく開催されたのである。

きょう海の彼方のローマの空の下では、世界の若人を集めて五輪大会がひらかれている。そしてきょうが18日間の最終日であり、きのうまでとれなかった金メダルがザクザク入り、君が代を奏でさせているという朗報が会場にも伝わり、川柳五輪の意気もグンと上がった態がある。

「番傘」「ふあうすと」「川柳文学」「平安」は多くの柳社の猛者連が一堂に会した壮観は柳史のページを飾るにふさわしいものがあつた。

西尾葵氏の司会で一時すこし回わつたころ、誌壽四〇〇号を祝う川柳大会の幕があげられ、まず開会の辞を不朽会副理事長松江梅里氏がのべられた。

満場の拍手に迎えられた路郎主幹と霞乃女史が、祭壇中央へしずしずと歩をはこばれ、ここに歴史的名な献花の儀が行なわれたのであ



敬禮なる献花の儀・路郎主幹と霞乃女史（光輪氏撮影）

### 祝 辞

まずもって本日の盛會を心からお喜び申し上げます。「川柳雑誌」が大正十三年創刊以来月々の発行をつづけて、三十有余年、延々四百号の齡を重ねられましたことは、誠にめでたい限りでありまして、関係者の皆さん方の御努力まことに容易ならざるものがあつたことと深く敬意を表するものであります。

ことに「川柳雑誌」は当初から麻生氏を主宰者として異色のある作風をもって出発されて以来、川

「いのちある句を作れ」と救えて多数の優れた門下を育成指導されると同時に、半面主宰者として経営の責任を背負われた麻生氏の御苦勞はまことに並々ならぬものがありであつたことを拝察いたす次第であります。

また麻生氏は先年関西短詩文学連盟を結成し理事長として、さらに短詩各部門の飛躍的發展に尽瘁されつつありますが、こ二十年來、市民文化祭の川柳大会においても、「川柳雑誌社」の代表として、いろいろと御苦勞をいただいておりますことは、誠にありがた

く感謝にたえない次第であります。

どうか皆様方におかれましてはこのたびの慶びをさらによき心の糧として、今後益々川柳の發展に御尽瘁賜りますよう、ここに皆様御健康と御活躍をひたすらお祈り申し上げます、私のお祝いのことばといたします。

昭和三十五年九月十一日

大阪市長

中 井 光 次

### 祝 辞

大正十三年二月に創刊された麻生路郎氏主宰の「川柳雑誌」がこのたび九月を以つて誌令四〇〇号を迎えられ、之を記念して今日ここに盛大な祝賀會を開催されますことは、私の心から喜びとする外でございませう。

創刊以来実に三十六年、この間



すべき一瞬がここにあった。

また麻生霞乃女史には、不朽洞会からとして、生々庵副主幹から記念品が贈られ、ともに四百号の誌寿をわれわれも心から祝ったことである。こうした感激のかずかずはよき一生の思い出となろう。

小娘後、いよいよ記念事業の一つ、川柳大会が、最高の選者諸先生を得てけんらの披露がはじまるのだ。

兼題は、岸本水府、梶元紋太、堀口塊人、布部幸男、中島生々庵、席題は、伊志田孝三郎、本田溪花坊、三条東洋樹諸先生という豪華なもので正に歴史的といえよう。

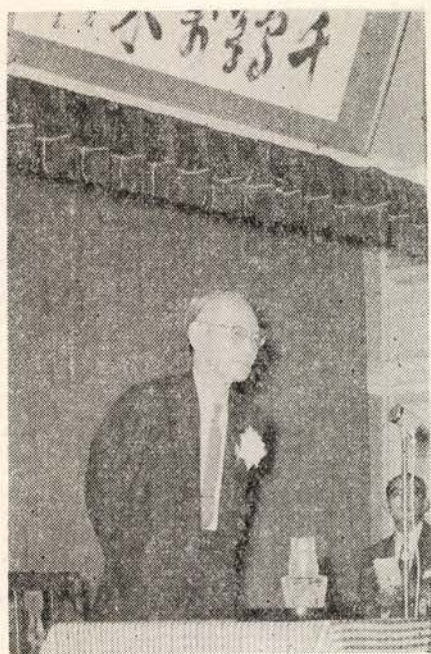
各選者がその披露に先き立って川柳刊の頃のことや、または逸話など、それぞれ祝辞にかえて、

四百号祝賀川柳大会をより意義あらしめてくださったことは、なんとしてもありがたいことであった。それに各柳社の方々から祝賀ご参加の玉句をたまり大会委員の感激も大きかった。

布部幸男氏がウマイことをおっしゃった。きょうの天地人は、ローマ大会そのままに金、銀、銅賞のメダルだ。——その金銀銅が各社の雅号にあったこともほえましいことであった。

ローマ大会最終日が四年後の東京大会への第一日であるように、きょうの四百号記念が次ぎの五百号記念へとつづいているのである。川柳の聖火は永遠に燃やしつづけるのだ。

(不二田三夫)



謝辭をのべる路郎主幹(光輪氏撮影)

## 祝電感謝 (敬称略)

大島澤明・高須亜三味・青森川柳社・大野風柳・川柳出雲支部・川柳文学社・増井不二也・福田丁路・須崎豆秋・立花屋・牟田一哲・武部杏林・

★

## 懇親宴

不朽洞会宴々員と自称される毎日放送の岩崎愛二氏が出席されるころから、会場は宴会用のテーブルがそここにならぶ。

第一テーブルには路郎師を囲んで、水府・紋太・塊人・孝三郎・東洋樹・竜樹・片山(市長代理)諸氏が、大阪府知事・大阪市長寄贈の清酒で乾杯。さすがに大家連と座をとにもするというので出席者の半数が宴会に残るにぎやかさだ。

とりり百余名が酔眼を交わしあうころ、遠来名古屋の伊志田孝三郎氏が「ソーラン節」を披露されると、石川県の茶仏氏が「小原節」いわを氏、花奈女さん、水堂氏、賀峰氏ときれいなので満場をわかせ、阿茶さんの唄、三味線で霞乃女史が「萩桔梗」を舞われアンコールに応じて小唄「惚れて通えば」が出る。生々庵氏の唄「廻り灯籠」から潮花氏と梨花さんの相舞「川風」北人氏の「オデモヤン」静水氏の詩吟といずれも名流名人ぞろいである。

しかし各人の胸には今宵の宴が



写真説明・記念品贈呈・左から生々庵副主幹・霞乃女史・路雨氏・路郎主幹(光輪氏撮影)

五百号、六百号へのスタートを切る前夜祭のつもりか、その眉宇にただようものは川柳前進の決意の色だ。最後に水府氏の、

「路郎君の健康と川柳雑誌の隆盛を祝して」の万才三唱に、満堂これに唱和し、意義深い一日を記録した。

(橘高薫風子)

出席者―路郎・隆史・竜樹・柳雪・ひか平・清人・花村・万葉・大丘子・春栄・生薑・黙平・紅月・

光輪・溪花坊・岳風・知恵・夢想・唐佑・操子・いづみ・きさ子・夢虹・す・む・悦子・榮・文蝶・梅志・古方・奈良子・昌男・水客・竹莊・白木・没食子・淡舟・満潮・笛生・白柳・小石・静馬・兼造・水京・清生・一三夫・多久志・八郎・徹也・史風・いわを・阿茶・澤介・月都・旅風・柳宏子・牧人・摩太郎・狂二・蛙水・永断・静水・正一・舟遊・文秋・塊人・むさし・俊和・高史・大路・眉水・良・沐夫・満秋・新子・薫風子・言也・久米雄・陽子・醉升・与呂志・晃・潮花・紫香・春榮・季費・柳志・圭开堂・好郎・一栄・清子・雄声・梨花・いさむ・恒明・小松園・凡吉・凡九郎・三司・鷗汀・一瓢・凡吉・柳村・幸石・愛論・堰子・味平・緑雨・茶仏・花奈女・南宗・生々庵・客遊子・朱紅・三窓・水府・東洋樹・蟻朗・水堂・宗悟・繁雄・紡毛・しのぶ・賀峰・勇・政俊・東天紅・武助・浩青・敬太・一十・幸男・初甫・入仙・峰子・和三郎・和友・孝三郎・一四・左久良・美恵子・北人・形水・六童子・町純・紋太・良子・大和・宗一・竜大・福子・柳二・寿々香・武男・徳松・茂夫・美代二・詩朗・秀峰・芳男・安正・喜久丸・豊三・文男・春信・杏二・詩乃夫・竹郎・久美子・雄三・秋雨・柳芳・千登里・白夢・愛子・金鳥・一角・仙造・白峰・ただし・句朗・一帆・泰三・光男・喜美・優子・よしかず・銀波・柳糸・雪洲・ひかる・千早・久寿夫・用二・明男・愛二・宏子・霞乃

地

ご発展大慶至極しらしら 天 どんなく

雨を知らぬ商店街の 軸 下性骨 木府

兼題「思ひ出」 梶元紋太選

食ひ違ふ思ひ出もあり老夫婦 梨花  
そうだったなあで思ひ出甦り 太路  
思ひ出の多い車窓に旅つづく 季賛  
あの時は愉快集まる度びに酒 隆史  
思ひ出の手記をマスコミ奪いあい さぎす  
思ひ出の路次をわきま来て曲り 梅志  
停電もよろし思ひ出子に語る 新子  
思ひ出の一人は名士になつて居り 木堂  
思ひ出の曲にパチンコ屋で出合い 白柳  
思ひ出と拾ひ貝殻多すぎる 武助  
思ひ出になろうと嫁ぐ娘旅につれ 花宵  
思ひ出のペンチ子供ら覚えてる 梅志  
思ひ出へすげなく舗装された道 旅風  
思ひ出の写真優越感に満ち 半休  
思ひ出を別に挨拶する二人 操子  
思ひ出やなくてモンペをまだしめい 堰子  
思ひ出はなしみんな美人ばかりなり 紅月  
ピンボケをただ思ひ出に貰うとき 静水  
切り抜きに思ひ出がある埃吹く 万葉  
想ひ出を静かに話し欲もなし 弘平  
思ひ出へ顔が出て来て邪覓をする 花乃子  
お悔みについ思ひ出が長くなり 陽子  
思ひ出へ女は月日まで覚え 日満  
思ひ出があるガリ版のじが錆び 入仙  
静養続く思ひ出をおしのけて 入仙

地

天  
思ひ出へ互いに若い声がでる 史風  
軸  
思ひ出を拝聴記者の若いこと 紋太

何のかのと云つては揃う飲み仲間　すゝむ

飲み仲間 ホシ が点けば気が揃い  
 うまいものや見付けて来た  
 飲み仲間 話の解る 妻を持ち  
 悪友にされてしまった  
 飲み仲間 今日はお前の顔で飲み  
 飲み仲間 だけが残った通夜の席  
 二級酒で満足してる  
 飲み仲間 酒があるから酒を飲み  
 お互いの女房も知らず  
 飲んでるへいるからでんで来る  
 句会からうずうずしてる  
 ライバルと意識しな  
 常連がよくも揃うて  
 重役になれそうもない  
 飲み仲間 いつもの席をあけて  
 飲み仲間は融通がつく  
 政治観いっしょに  
 ヤーさんと云えば通じる  
 飛鳥 黙平 満潮 実男 愛論 路也 篤生 三司 美喜子 梅志 朝太 田舎 茶仏 満秋 葉光 一三三 梅里

初恋の話がない飲み仲間  
飲み仲間一つ覚えの唄を聞き  
霊前に酒を供えて飲み仲間  
着任の課長は昔の飲み仲間  
おしほりへ今日も仲間の顔揃え  
つけのきくとへ回った飲み仲間  
真ともには名前をいわぬ飲み仲間  
飲み仲間女房も少しいける口  
いつまでも戦友という飲み仲間  
名付親任しておけと飲み仲間  
飲み仲間女の要らぬ顔ばかり  
全快へ先ずとんでくる飲み仲間  
飲み仲間お通夜へ済まそう来る  
こう音痴ばかり集めた飲み仲間  
飲み仲間みやげの刀派手に持ち  
来なればうちから行く飲み仲間  
飲み仲間肩たなかれて乗り換える  
何のかと云つては揃う飲み仲間  
顔のきく一人に皆なまかしとき  
二次会へ眼で誘われる飲み仲間  
奥さんを恐わい同志のはしご酒  
痛でないことを祝えと飲み仲間  
血圧をいましめ合うて飲み仲間  
飲み仲間酔うて見舞いに来てくれる  
妻君の電話で帰る飲み仲間  
終電ではったり会うた飲み仲間  
飲み仲間妻に言わすところでないし  
肝臓で入院してる飲み仲間  
言訳は俺がしてやる飲み仲間  
飲み仲間互に我が家案じつつ  
お互に弱くなったと飲み仲間  
残業の一人を待った飲み仲間  
定量をもう気にしあう齡になり  
肝ぞうの話をそらす飲み仲間  
モテたのが払つてくれる飲み仲間  
飲み仲間別てからを電話する  
峰子  
入仙  
八郎  
女郎  
流宗  
紫香  
眉木  
太路  
和友  
凡子  
竹莊  
柳宏子  
妖人  
保夫  
光輪  
旅風  
梨花  
すむ  
湖山  
初甫  
豆秋  
井主堂  
言也  
峻艸  
史風  
紅月  
晃  
梅里  
九紫  
粉洲  
知恵  
寿栄  
晚穂  
久米雄  
そうる  
蕨風

二人来てまた一人来る飲み仲間  
男みな婦してからの飲み仲間  
飲み仲間苦笑し合つて朝の駅  
恩給がどちらにもついている飲み仲間  
又行こだけで通じる飲み仲間  
飲み仲間一人が十票とると決め  
飲み方に話をむける飲み仲間  
飲み仲間飲めなかつても飲み仲間  
飲み仲間公益社へも行つてくれ  
デカシヨの頃から永い飲み仲間  
病床へ菓子持つてくる飲み仲間  
飲み仲間安うてうまいとこがある  
ビネスのことは知らない飲み仲間  
阿呆なことを言うて終つた飲み仲間  
飲み仲間孫一人出来二人出来  
その方の義理には固い飲み仲間  
タクシヤを拾つてくれる飲み仲間  
飲み仲間参考人として呼ばれ  
一方はいつも開手で飲み仲間  
程々の酔が自慢の飲み仲間  
飲み仲間誰が誘うたわけでなし  
台この勝手知つたる飲み仲間  
地 人  
飲み仲間名利をもちたこともなく  
天 手  
手のひらへ金を集める飲み仲間  
君はもうやめとけと云う飲み仲間  
兼題「巨人」 布部 幸男 選

巨人にも急所があつた向脛  
石段をのぼる巨人の荒い息  
巨人軍負ける度びごと人気が出  
人形の中に坐つて巨人めく  
へべれけへ女房巨人のよう立ち  
大ものも家では孫の馬にされ  
大仏へ銅貨小さい音を立て  
インタビュール巨人は汗をふきあす  
心ブラに巨人が歩く釜御飯  
敗けつぷりよいとは巨人びいきなり  
巨人フト俺は阿呆じゃなからうか  
正月の雑誌へ巨人また撮られ  
巨人いま両手をついてかえす恩  
興亡の歴史巨人の眠る墓  
角界の巨人で余り強くなし  
小さい妻巨人の夫によく仕え  
巨人とはやされ禪かつぎで終り  
何食うているかと巨人又聞かれ  
巨人とも言われ山師とも言われ  
巨人にもやっぱり恐い妻があり  
関取りが立て天井の低い宿  
巨人のような子に囲まれて母の幸  
ウインキー巨人の腕を持て余し  
泣くときの巨人のなだるなまに  
一とつまみ巨人土俵へ塩をまき  
巨人にも小さな父と母があり  
大文字巨人の悪戯にも似たり  
巨人に生まれサントライトマンに生  
巨人待つ日本の政治淋しいな  
火を盗む役目を巨人引き受ける  
気の弱い巨人に對し京言葉  
演壇の巨人女のような声  
腕力に勝つて巨人のふと淋し  
関取を止めた巨人の勤め口  
姉さんは巨人弟はタイガース  
東西の巨人は空で駆けくらべ

ああ哀れ亭主が蚤に見える日日  
ドアマンとなつて巨人は侮られ  
一世紀たては真価のわかる人  
京の屋根われは霊山観世音  
業界の巨人小つちやな名刺入れ  
十六円持つて巨人が風呂へ行き  
アラフォーのような巨人の恋女房  
十三文半の男が鯛を売り  
かかる世に童話の巨人旗を振る  
柔道をやるかと巨人すぐ聞かれ  
学生の巨人落第かと聞かれ  
陣笠を巨人と崇めひと素朴  
欠点もあるさ弱点もあるが巨人  
生きていけるうの巨人に気がつかず  
お相撲さんと婚約をして見直され  
言葉少く巨人運命に逆らわず  
五尺七寸の我が子の反抗もあまし  
猛犬の散歩に巨人雇われる  
巨人の無口は妻を疲れさせ  
失恋の巨人テレビのコメデアン  
母からは巨人もあの子と呼ばれ  
巨人また宿の浴衣を笑われる  
名優の演技舞台が狭く見え  
銀行に巨人のよう大金庫  
相撲から巨人の卵買いくる  
反則に巨人へ義憤空手打ち  
堂々としていて社長とまちがわれ  
福寿草のごと妻が控えている巨人  
市電来ず夕陽のビルを巨人と見  
水虫は巨人の靴を引きずらせ  
よく肥えた夫婦二人で四十貫  
ジャイアント負けた所で劇に替え  
巨人また落第生と間違われ  
枯草のような胸毛で巨人病み  
巨人会の中で小さいのが幹事

地 天  
クツシヨンのしばし巨人のまじになり  
朝潮の弱気が好きで女なり  
兼題「よろこび」 中島生々庵 選  
よろこびの足で魚屋へ寄つてくる  
逆境にあるよろこびはつつましく  
よろこびは和服の裾をとりみだし  
よろこびを温めておく日記とず  
よろこびの酒へ行儀を許し合い  
悲しみもよろこびも親ききたがり  
手ばなしでよろこぶ妻をあふながり  
よろこばせおいて次は寄付を取り  
優勝のよろこび汗を友が拭き  
よろこびの涙を孫に笑われる  
よろこんで呉れと写真へひきまき  
風雪に耐えよろこびの座に涙  
よろこびの口上籠の鯛もはね  
院長もニコニコ今日は退院日  
よろこびを鏡の中でうなずかせ  
よろめいて来るよろこびをひたくし  
よろこびを祖母顔中の皺に見せ  
胎動へよろこびの手をそつと置れ  
つつましきよろこび親子の小さい鯛  
折詰を配つて喜びかきささない  
男の子生まれたを運ちゃんにまで話  
よろこびが顕微鏡へしがみつ  
よろこびの言葉が長いお燭番  
喜んでいます涙の電話口  
生還のよろこび人目はばかりず  
単純なよろこびよろこべるのうれし  
手放して喜びきれぬ輪となり  
よろこびを素直に見せて馬鹿にされ  
喜びの涙もやっぱり塩っぱい  
よろこんで呉れると思ふ手紙書く

出張の宿によろこび掛けてくる  
九呂平

合格を知って犬の走り寄る  
車

よろこびを家へ伝える呼び電話  
小夜子

よろこびへノックをせずに驚かせ  
青風

およろこび申上げときかて嫉き  
東天紅

かまきりのよろこぶ顔が怖ろしい  
とし嶺

下手な字でよろこびの墨をすり  
飛鳥

よろこびへうれし涙も添えてよし  
梵鐘

泣き事を言いに来たのによろこばれ  
晩穂

よろこびを素直に夫昇給し  
紡毛

よろこびの極みの果てのすすり泣き  
兎

よろこびに結うて夫によろこばれ  
峻艸

よろこびへ七十の腰びんと伸び  
満潮

よろこびをカナで済ませて筆不精  
風味

よろこびへ少し気になるナツラン  
富明

よろこびに寄せ書された便り来る  
美由起

よろこびへ騰くり足して顔を見せ  
没食子

ヌカ喜びさせて北浜暮れかかる  
恒明

よろこびの中へ祝電束で着き  
白溪子

万才をも一度お願いするカメラ  
美恵子

人  
よろこびの色はおみくじ吉らしく  
酔外

地  
こつちまでよろこぶ顔になつてくる  
花宵

天  
よろこびを一人になつてかみしめる  
美恵子

# 席題「カメラ」 伊志田孝三郎選

芸術と言う程カメラコリ始め  
いさむ  
緑側の母はカメラへ座を正し  
清子  
カメラ一ぱいに首相の低姿勢  
満潮  
お師匠さんの色気カメラ向けられる  
良子  
作品は又スードばかりのカメラなり  
多久志  
上等のカメラスードを撮るカメラ  
晃  
報道のカメラ必死と抱え込み  
兼造  
うっかりと立つてカメラの邪魔になり  
新子

ぶら提げて歩くカメラを借りに来る  
小松園

千円のカメラに父も並ばされ  
淡舟

青い眼のカメラに京の舞妓いる  
潮花

向けたカメラを袖をかき合わせ  
小石

新婚旅行カメラはあなた任せなり  
繁雄

秋を撮るカメラは柿の枝も入れ  
文秋

撮つたら撮つたらかとのカメラ  
高史

雨にきてカメラは邪魔な物になり  
鵜汀

旅先のカメラ女中もわり込ませ  
与志

頼りないババのカメラへ並ばされ  
言也

演壇はカメラを意識したポーズ  
柳志

ピンボケは月賦のせいでないカメラ  
朱紅

妻が撮るカメラは夫がよく写り  
蛙木

鉄骨のあんな処にカメラマン  
淡舟

塔を撮るカメラ少しずつ下り  
紫香

カメラ熱いまがさかりの顔で携げ  
旅風

笑わせて置いて暗着の母を写り  
操子

質屋から出て来たカメラとは見え  
紅月

黙祷の中靴音のカメラ班  
清生

人  
カメラでもあればと思う美しさ  
南宗

地  
本当の年齢をカメラに見つめられ  
梨花

天  
特種を撮つてカメラはあとも見ず  
牧人

# 席題「横丁」 本田溪花坊選

横丁に浪速情緒が生きていた  
紅月  
横丁に住んで通りを支配する  
圭井堂  
横丁で大きく飛んでいる番地  
北人  
横丁のオッサンでよい影の人  
客遊子  
横丁のそこから荷風出て来そう  
新子  
横丁にこんなホテルがある都会  
一三天  
横丁で名もない寿司の味に触れ  
笛生  
横丁へ曲がり口寒考える  
小松園

横丁へ来る聞き込みは龍をさげ  
史風

横丁をまがって空軍見うしない  
味平

横丁は名物街で甘辛屋  
没食子

横丁にひっそり住んで溜めている  
潮花

横丁に又ふえて行く魂のれん  
操子

横町で前売券を待つ長さ  
梅志

横丁が区劃整理で陽が当たり  
いさむ

横丁のここにも秋の盆踊り  
潮花

横丁にひっそり無形文化財  
政信

横丁の恋を見ていたビルの窓  
峰子

横丁の店も株式会社なり  
酔外

横丁にある駅前と言うホテル  
柳志

横丁で不況も知らず駄菓子売  
いさむ

横丁から来た豆腐屋を又逃がし  
太路

紅提灯ゆれて横丁のセッ出来  
梨花

税金のことで横丁もめつづけ  
六竜子

お渡りの供横丁へ勢揃い  
言也

コッポリで横丁のぞく美しさ  
光輪

土地かんがえて横丁までおぼえ  
小石

仲たがいの横町を振り向かず  
梅志

小説になつて横丁名が知られ  
竹莊

質草の時計横丁からはずし  
久米雄

煙に巻いて横丁へ戻つて来  
一瓢

ブラカード横丁へ来て風を入れ  
梅里

通らしく横丁の横丁曳き回し  
生薑

放歌放尿横丁の月が揺れ  
生薑

人  
横町へはいつて略図またひろげ  
文秋

地  
横丁の夜の原色が氣を誘い  
一円

天  
旅先の横丁へ来たコレクション  
万葉

# 席題「お世辞」 三条東洋樹選

言いつた世辞へ返事もせずに立ち  
きこ子  
お世辞ではないと断つてお世辞  
賀峯

下役がみな手料理をはめてくれ  
万葉

人前で尻こそはよい世辞に触れ  
言也

お世辞きき流し左遷の荷をまとめ  
梨花

むつとりとお世辞ききない模範工  
言也

世辞一つ言わぬ正直買つてやり  
舟遊

世辞言うにとも山本富士子とは  
ひか平

お世辞言う別の心を持ち合わせ  
一三天

冷蔵庫から何か出るといいお世辞  
梅志

父の手で世辞の言えない娘に育ち  
新子

世辞を背にきいて帯上げきつとめ  
阿茶

世辞一つ言えぬ気性を高く買  
三井堂

三つ指てお世辞を言つて茶も出さず  
和三郎

お世辞儀したお世辞足から下へ行き  
峰子

お世辞にもうまいと言えぬ味をかむ  
静水

人違いのお世辞カラッ引いたよう  
花村

寝不足の椅子でお世辞を聞きとめ  
入仙

定年へ他人の世辞へさからわず  
水堂

貧乏になれてお世辞がうまくなり  
浩青

税務署のここはお世辞も通じかね  
雄声

失意の日世辞にもすがりたい心  
左久良

世辞いらぬ同士かたまる慰安会  
水堂

自家用に乘せて貰つて帰る世辞  
万葉

駄菓子屋のお世辞は母がついている  
入仙

低気圧お世辞と言つて指にふれ  
雄声

お世辞言う黄色き肌の日本人  
三窓

呉服屋のお世辞が過ぎるなと思  
薫風子

人  
お世辞真に受けて髪の毛染め始め  
夢虹

地  
世辞言つて帰つた記者のさうい記事  
消生

天  
お世辞言う自分が厭になる落目  
亜鈍

軸  
借りに来たお世辞必死に世辞を言う  
東洋樹



# 衣通姫

(そとおりひめ)

## 富士野鞍馬

わかの神大きな色もした女

(万安元)

これは衣通姫を詠んだ句で「大きな色」というのは、允恭帝との恋愛である。

衣通姫の姉は、允恭帝の皇后であるので、この恋愛はちよつと面倒であった。皇后を恐れて、帝もそうしげしげと通うわけにもいかなかった。ある夕暮れに、藤原の宮の姫を訪れたが、姫もまた帝を慕って、

わが背子が来べき宵なり

さががねの

蜘蛛のおこない

かねてしるしも

と詠んだので、一入帝のお気にいったという話が伝わっている。蜘蛛が垂れ下ってくる待人来るといふ迷信が、この歌からあったことが、この歌でも知れる。これを川柳は見逃してはいない。

虫が知らせるわが背子が来べき宵

(タル一三二)

蜘蛛の巣を見ている目もと美しき

(万明五)

暮れかかる軒端みている美しさ

(タル二六)

美しい目もとで蜘蛛の巣に見とれ

(〃六〇)

さががにの振るまい膳を据えて待ち

(〃二五)

心待ち衣通姫が元祖なり

(拾五)

さががにを御簾へ包んで心待ち

(タル三二)

くらやみへそとおり姫はあなをあげ

(〃一〇)

などと詠まれている。

衣通姫は、本朝三美婦の一

人で、名は弟姫、容姿秀麗、

艶色衣を通して輝やいた程であつたので、「衣通姫」とい

つた。允恭帝は、四一二年一

四五三年の在位であつたから

その間のことということにな

る。その衣を通して輝いた程の美しさを、

十二枚召しても外へ徹すなり

(万天二)

十二枚召しても御身が透徹り

(タル一六二)

緋の袴召さぬと玉が透徹り

(〃九七)

緋の袴召さぬとみんな透徹り

(〃一〇六)

衣通に御ふんどしのなかりせば

(〃一四九)

一とこ衣通姫も御困り

(万明三)

衣通ははえたをいっそ苦勞がり

(末四)

透徹るほかに三十二相なり

(タル五一)

和歌の神葛原のよう透き

(〃一二〇)

などと、身体が着物を透して見えるように洒落て詠まれている。

後、衣通姫は、紀州和歌の

浦の玉津島明神として祀られ

住吉明神、人丸神社と共に和

歌三神といわれて、

明神と明神の間透徹り

(万天五)

三神は颯るとよみし御姿

(タル初)

と詠まれているが、厳格にい

うと三神は、底筒男命、中筒

男命、表筒男命の住吉三神を

いうので、一般に「三神」と

思われているのは、和歌三人または三聖の、柿本人丸、衣通姫、山辺赤人で、これが錦絵などになつていた。その錦

絵を見ると、左が人丸で、そ

の画像の上に、

朝きりに

しまくれゆく

船をしたそ思ふ

の歌が書かれ、右が赤人で、

夜やさむきころもやうすき

かたそきの

ゆきあひの闇より

霜やおくらん

と、真ん中は玉津島——衣通

姫で、

という歌を書いて、美人の姫

が描かれてある。「なぶると

よみし」は、左右が男で中が

女で、その文字の通りだから

洒落たのである。

真ん中はまだうら若き御容顔

(タル四六)

真ん中はまだ面白お年なり

(万安六)

面白く後家を真ん中に置き

敏ものびそな姿を中におき

(タル三四)

正面に目立つ三分の玉津島

(タル二六)

等、真ん中の美人衣通姫を詠

み、左右の人丸、赤人を老人

にして、

左右に白髪紙打の玉津島

(タル一三三)

梅干を左右に花の御容顔

(〃五六)

ビードロの左右薬缶と薬缶な

り

真ん中は若女左右は千大根

(〃四〇)

酒 清



灘・魚崎

大塚合名会社醸

立かへりまたも此世に

跡たれん

名もおもしろき

わかもうら浪

という歌を書いて、美人の姫

が描かれてある。「なぶると

よみし」は、左右が男で中が

女で、その文字の通りだから

洒落たのである。

真ん中はまだうら若き御容顔

(タル四六)

真ん中はまだ面白お年なり

(万安六)

面白く後家を真ん中に置き

敏ものびそな姿を中におき

(タル三四)

正面に目立つ三分の玉津島

(タル二六)

等、真ん中の美人衣通姫を詠

み、左右の人丸、赤人を老人

にして、

左右に白髪紙打の玉津島

(タル一三三)

梅干を左右に花の御容顔

(〃五六)

ビードロの左右薬缶と薬缶な

り

真ん中は若女左右は千大根

(〃四〇)

左右が提灯まん中が透いて見

え

真ん中は鰯口左右には提灯

(〃一九)

などと詠まれ、「紙打」は女

乗物、「ビードロ」は美人の

形容、「鰯口」は女陰のこと

で、いずれも衣通姫を表わし

ている。また、

和歌の浦左右は朝と夜の休

み

## 金 泥 集

## 選 乃 菫 生 麻

## 課題「小 銭」

心がけよくアルミ貨も持ちあさき 阿 茶  
 アルミ貨を車掌鉢でつまみ上げ 同  
 赤電話小銭はしさにガムを買い 同  
 子連れで行くデパートへ小銭持ち 美音子  
 旅の子へ持たせる小銭かき集め 同  
 店先きの金庫は小銭だけ納め 同  
 小銭だけ持って夜店を散歩する 小 石  
 ズボン吊れば小銭バラバラころけおち 同  
 一円を拾うて小判の端くれや 一 栄  
 衣がえ小銭さくさく出るボケツ 同  
 御利やくへ小銭を投げて鈴も振り 知 恵  
 小銭入振って泣く児に聞かす音 同

こつぱりが二人小銭を見合うて きさ子  
 陽は西に小銭と帰る旅まわし 同  
 百円も小銭のうちと世は変わり 同  
 商いも子供相手の小銭なり 同  
 昔にはこんな小銭で家も建ち 万 女  
 汽車の窓小銭の財布別に持ち 同  
 小銭もう狙わぬ程に大人びて 清 子  
 うつ伏した拍子の小銭派手な音 同  
 ヘソクリの小銭が株買う額になり 白 美  
 パチンコに小銭もないほどとなり 同  
 うっかりと小銭とび出すズボン吊り 春 栄  
 家計簿の前へ小銭も並ばされ 同  
 老いの身のひとり淋しくない小銭 若 菜

次回題「先 客」切十月末日

(タル六〇)

紅圍へ垂れるは憎い玉津島

(タル一〇四)

等と作られている。この外に

玉津島だと桑天は腰がぬけ

(タル一四八)

という句がある。唐の白楽天

は、海路わが国へ向って来た

が、和歌の神、住吉明神が現

われて追いかえた。それが

衣通姫だったら、あまりの美

しさに、白楽天は腰を抜かし

ただろうと、おもしろい句想

である。

## 髪の名は

不二田一三夫

船も帆も色紙に霞む和歌の浦  
 (七 七七)  
 垂れんとは似合わぬような御  
 神詠 (万安元)

34年12月号(三九一)号に「川柳髪形考」を奥津磨一朗氏が執筆された。  
 女性の髪形を大別して、日本髪と洋髪に別けることが出来る。今ここに川柳を通じていささか明治以降の変遷のあとをたどってみたいと思う。  
 という書き出しで  
 遠くから両手をあてる高島田 拾ン坊  
 此の親にして桃割の値が 七厘坊  
 定まり 天民子  
 丸髷になって聊か淋しが  
 二柳子  
 桶巻は言い切らずして立  
 って行く  
 日本髪悠然として背が低  
 路 郎

束髪にして面長を自覚する 嶺 月  
 女優髷とは梳き髪の出来心 本 府  
 継母もやっぱり同じ耳隠し 夜叉王  
 断髪娘親とは別に住み 旭 華  
 島田からパーマに変わり ぬ  
 れる あみ女  
 と、明治・大正・昭和前期(戦前)までのヘア・スタイルを興味深く発表された。  
 敗戦後は防空頭巾(ずきん)のじゃまになるので短かく切った、そのレジスタンスとでもいうのかロングヘアが流行した。そしてアッというまに、こんどはまたショートカットだ。それだけでは

あきたらずツケ毛、ツケまつ毛。その果は、あたら緑の黒髪を赤く染めだした。イヤハヤ、美容院は倉が建つ。

「川柳髪形考」の稿末には

私共の少年の頃は赤毛や、ち切れつけの少女をみると悪童共がいろいろからかったり、いじめたりしたものだが、敗戦後古領軍の進駐とともにオンリーや、パンパンなど自から髪を赤く染めるものが目立って来、日本髪ので姿も遠き過去のものとならんとして

いる。

と、嘆かれています。

最近、タニシを冠ったような髪が流行しているので、ひとつ川柳にしたいと思つて、タニシ嬢諸クンに「その髪、なんと云うの?」

ときいたが、誰一人知っている娘さんがいない。『髪の名は』どう

でもいいようだ。

『君の名は』の岸恵子が、真知子巻きを流行させて、外国へお嫁

に行った。

こんど帰日した時、このタニシの髪でアッと言わせたようだった。このタニシ髪こそ、正しくは

「デュオ」というのだそうである。(大阪日日新聞)

真知子巻き残し デュオ

を持ち帰り デュオ

タニシ冠ったようなデュオ

オ街をのし 一三夫

お次きはどうなのがバヤるのか

興味しんしんたるものがある。



# 川柳の大衆性

後藤梅志

## 歯車の題

さきごろ或る句会で「歯車」という題が出た。選者はリアルな選者で、極めて妥当とおもわれる選をしたが少し厳選であった。しばらく句会から遠ざかっていた選者にとって、目にとまる句がなかったことは止むを得ない。さて句会がはてから遠慮のない人達とて懐旧談から句の品評にうつったが、はしくも歯車の没句を中心に議論が集中された。

歯車というものは単なる機械の一部か。或は、歯車は歯車でもこれによっていろいろな連想がこる。地球の回転にたとえ、人生のさまざまな出来ごとをからませるという作句態度は不可であろうか。というのが議論の分岐点になり、熱心な討議がつくされたが、その席でこの川柳の大衆性というのが組上にのぼったのである。

歯車という題は単なる一例に過ぎないものであって、類例は数限りなくあるが、良心的な選者の選

というものは提出された題にはおおむね忠実であって、そう簡単に妥協はしない。之れに反し作家の側は奔放に詩感を駆使して日頃の鬱憤をならしたくなる。真面目に生きる人はど川柳によって生き甲斐を求めようとする。そこに一つの選者と作家の対立というようなものができる可能性がある。

わたしはこんなことから、川柳のもつ色々な要素、頭の中でもややしている鑑賞の対照となるべき川柳と、われわれの手によって生み出され行く川柳の必然性を分析して見ようと考えた。

★

わたしは中年時代を西九州の炭坑地帯で送ったが、時恰も昭和六、七年の最不況の時代で、炭坑争議はひん発し、要件も多く、九州佐世保市と大坂の間に月に二回は往復したが、その当時の汽車は十六時間を要した。往復の車中は急がぬ読書の時間に当て、その車中では商機を掴む禅書のたぐい菜根譚などを多く愛読したが、わ

けて俳書にはよく親しんだ。川柳にもその当時から興味をもっていたが、所謂社会人の教養として親しむには物足らぬものがあつた。俳句は虚子、鬼城、鳴雪らを古くから愛した。つまりこれらの人の句は社会人にとって分かり易かつたからである。社会人といつても当時の人は或る意味に於いて一国一城のあるじの意識が強く、何か己れに資するものでなければ読む気がしなかつた点もある。私は俳人を父にもつたが、句というものに親しんだのは青年時代と、この中年期のしかも経営に難渋した不況の最中であつた。だから作句のゆとりはなく専ら鑑賞をこととする外なかつた。今の人は俳句を花鳥諷詠と一言に片付けてしまふが、俳句や和歌には、日本という国を愛し、わが国土と国人を愛する句が多いのである。さればこそその諷詠には風格があり、侵すことの出来ない基礎をもっているように見受けける。その点で川柳は損をしている。当時の私は柳

樽なども読みかけはしたが、胸奥に迫る句はすくなく多くは失望した。そこには市井人の戯れ言しか見出されなかつた。ただその中で

故郷へ廻る六部は気の弱り

という句だけは心をひかれた。この句はやはり名句だつたようだ。その後もよく人がはめている。井上剣花坊の川柳もよく読んだものだがどうも少し卑猥なような気がした。剣花坊という名前も少し氣に食わなかつた。鑑賞家というものはそうしたものののである。

しかしわたしはその後昭和九年の頃俳閑節を思つて責任者の地位を去り、川柳作家の仲間入りをすることになったのだから、機縁というものはどこにあるか分からない。

前置きがすこし長くなつたがそれは私が川柳の専門家ではなく、むしろ今もって社会人で、鑑賞を主とする川柳作家であることを知つて欲しいからである。

## 鑑賞にたえる川柳

その頃前田雀郎氏の川柳随筆らしきものを見た。その中に関東震災（大正十二年）の句があり、初めて川柳というものに注目した。

関東の震災は東京横浜の全市民を丸裸にしたものでその記憶は十年あまり過ぎた当時もまざまざと頭に残っており、掲載された多

数の句はみな活き活きと、当時の惨たんたる一朝にして覆へた東京市民の生活状態を写していて私を驚ろかせた。

当時チェックした句は

関東震災の句

夢の様でしたと独りぼつち也 紅笑子

配給に老母頂く癖がつき 雪葉

家中で慰問袋の中をあて 逢二

と云つて今更大工にもなれず 茂坊

焼止り小癩にさはる様に 直山人

売れ 直山人

気の毒にしても避難者長過ぎる 青秋郎

撥だこを見つけて騒ぐバ 直山人

の客 焼跡へ帰らぬ女途で逢い けい坊

避難して来れば妾に子まであり 茂坊

お前のも池に居たよと嫌がらせ 美津夫

被服廠見て来てからの奢りなり 雀郎

四十句あまりの中から、抜萃したこれらの句を見ただけで、震災の交りてはた状態はよく分かる。「描写の力」川柳のもつ描写の力というもののいや応なしに引かれたのである。

最後の二句は、「お前のも池に」は吉原の廓内にあった池のこと、何百人の遊女が二た目と見られない姿で焼け死んでいた。「被服廠」は、数万人の人が避難したまま無惨に屍と化した本所被服廠跡のことである。

同じ十七文字でも俳句には含蓄があり、川柳にはそれがない。見たままであり文字の一つ一つが平言俗語につながり読者に訴える。これが川柳の生命であり、俳句とちがうところである。

## 漱石の句

夏目漱石と云えば知らぬ人もない大文豪であるが、俳人としては余り目立たぬ。しかしその作品は専門家俳人の遠く及ばぬものをもっていた。描写の奥行の深いことと、感覚の鋭いことは、氣宇の大きさと相俟って大いに鑑賞に価するのである。一つ二つ例を挙げると

雲の峰雷を封じて聳えけり

風や海に夕日を吹き落す

飯食へばまぶた重たき椿かな

生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

有る程の菊堀け入れよ棺の中

この句には「床の中で大塚楠緒子さんの為に向ける句を作る」と前置きがある。

全く小市民的の匂いのないこうした句は、一般社会人にその人柄

も分かり、そのもつ句韻に打たれるのである。

こうして見ると俳句も川柳もみな社会の人達の要求によって生れて来たことが分かる。専門家が、いや川柳の傾分である。俳句の傾分であるというのは可笑しいのである。

## いい句ということ

木村半文銭著の「川柳作法」に「川柳代表句選」というのがあり。古川柳の良さは吾々は一応知りつくした。そしてそこには独特のものはあるが、余りに時代的に隔絶した生活の内容が一概にこれをお手本とすることを躊躇させる。この半文銭氏の蒐めた多数の代表句は、何れも大正年代のもので、時代の良さを感じさせ、また優秀な作家ばかり揃って、よくもまあこんな句が作れたものだと感じに堪えさせるものがあるから、その中から三十句あまりを摘出して見た。

### 大正の代表句

大仏の鐘杉をぬけ杉をぬけ

五葉

いつそもう気楽と世帯崩し也

当百

酌ぐまねをさして女将は

五葉

聞くばかり

五葉

間違つて売って屑屋はそ

れつきり

当百

身を売った娘に不作続く

也

半文銭  
寿は双児へ鶴と亀をうけ

五葉  
心中の残る一人に借が殖

半文銭  
え

刑事室度胸は未だ定まら

ず

当百

朝の風呂ヒョイ／＼

五葉

と膝喰場

五葉

お眼ざめか手拭に礼添え

路郎

簪を人の字にして叱られ

三日峰

叩かれてよろよろと出る

半文銭

朝帰り

半文銭

後添は年中風邪をひく女

当百

夜蕎麦売私も風邪をひき

玩月

小袖斗あつて用なき品ば

静波

かり

静波

宿帳も座敷も隣り合せ也

八翠坊

証文に絶交をした二人の

半文銭

名

半文銭

夏瘦に無口が目立つ姉娘

路郎

国の母頼み少なき文をく

青明

れ

青明

乞食小屋秋になつたらな

紋太

ったやう

紋太

執達吏倉へはいって眼が

利かず

柳珍堂

象の眼はまあお這入りと

言った風

五葉

道化役ほんまに腰がぬけ

半文銭

たやう

半文銭

この事が知れたら女房死

五葉

ぬ気也

五葉

呼べただだ縫ものをする

緑天

母の老

緑天

控へ目の男も同じ養子也

当百

当百

当百

私生児は母の緞縹と父の

路郎

才

路郎

悪人が栄へたままで初日

南北

果て

南北

引け過を俤夫は勸られ損

路郎

になり

路郎

小説の片手這ふ子の帯を

紋太

もち

紋太

これらの句は豊かな芸術味をも

ち、如何なる人の鑑賞眼にもたえ

るばかりでなく、世態、人情の真

味をうがち真に名句というべきで

あろう。しかし作者の名前を見れ

ば分かる如く、この作者はみな天

才豊かな人達で一朝にして出来上

る作品ではない。

この「川柳作法」の代表句に選

ばれた句は、全部で二四三句で

右の三十句はとつときの約三百句

あまりの中から摘出したものだ

が、この辺からあとは段々生彩を

# 神経痛・リウマチに...



オサドリン錠は西独クノール社が多年研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。その作用は確実に胃腸障害などの心配がありません。(10錠) 350円・(20錠) 650円

## オサドリン錠

# 絵と川柳で表現する歴史 (第九回)

戸田古方

## ⑯ 日本国家の成立

中国の書物に一〇〇ほどの

国が三〇ほどにまとまっていったことがかいてありますが、さらにより大きなものにまとめられていったことが考えられます。

さきにのべた邪馬台国の場所が九州か大和かはつきりしないのも九州と大和に同じような国があったことをいっているのかもしれない。

その頃のことでしょうか、少したってからかも知れませんが、発掘品によって、銅と、銅鐸を宝物にしている種族のあったことが知られます



## 3C日本国家成立

が、これも二つの大きなまとまりを教えているのでしよう。位のことをアマツヒツギとい、皇太子のことをヒツギノミコといっています。ヒツギ

さて統一の方法ですが、火の火をもちよって、一つの火皿にそれをいっしょにもやして二つのものが一つになれたと考えたのであります。

大昔以来、火を大切に生きていますので今でも天皇の豪族がいます、天皇も亦そ

缺いて来ている。余りに変り方の烈しいのに不審を抱いたが、この代表句なるものは相当長い期間の作品を集めたもので、この著書が発行された大正十五年六月のころは、久良伎、剣花坊に始まった新川柳は、これらの作品をのこして、一応行き詰まりになったのではないかと考えた。

だがしかし、これは長い期間に亘る一つの現象で、一つの過程として止むを得ない。それよりむしろこれら作品のもつ稀少価値をたえねばなるまい。注目すれば分かるが前掲の作品には、ユーモアとか批判とかとりたてたうがちとか、そうしたものの匂いは一つもなく、ただ作品にただよう円熟した芸術味というものが感ぜられ全く吾々の手に成る作品とはちがうことが分かるのである。

大層これらの作品を讃美してしまつたが、それは川柳家としての観察であつて、全く川柳に縁なき人達にとってはこれらの作品が人を肥やし、人を導く勝れた作品と眼にうつるかどうかは甚だ疑問で、川柳が世人に大びらで理解されない缺陷がまだまだ蔵されているのである。それは、作品の良しそのものが低俗であるという点でこれは一種の宿命に似たものだ。

### 路郎の句

わが師路郎の句は、別に「句集旅人」によって広く紹介せられ、

## 雅号由来記

伊達壺子

元は赤子でしたが、あかこは元と呼ばれる時もあり妙な気になりまして同じ発音の壺子と改めました。私なりに追従を許さない作風の壺を立てたいと張切った雅号なんです。川柳塔では毎号一句組、大万川柳では相も変らぬ幕下くらの束ね髪、いやもう道連れ事です。豆秋さんや十悟さんも元の赤子の方が似合うでバックやバックやと云われてますが、どうでも壺子で通す積りで居ります。

その作品のもつ気魄というようなもの強く吾々を打つのであるが、私の鑑賞眼からして、殆ど類句を超越し、作品価値を高めさせる句として

俺に似よ俺に似るなと子をおもひ

を挙げたいのである。なんだ君は今頃そんなことを云うかと云い給うな。この作品価値を本当に知っている人は何人あるかと私は思っている。路郎はこの一句を作るために生れて来たと言つても過言ではない。それほどこの句は川柳としての缺點を一つも帯びていないのだ。低俗のかけはどこにもなく世の達人、顯官といえども人の親として胸を強く打つ句なのだ。

こうして見ると、句には上の上があるということが分かる。わずかに十七字であるが、こんな作品、

の豪族の一人として、国の支配者になったので、後の大化の改新まで、いわば豪族の連合国家であったと考えてよいのであります。神武天皇や日

## ①⑦ 朝鮮半島と日本

古代アジア史における漢の地位は絶大でした。半島の北半分は漢の領地で、半島人は

飛びこみ、百済や新羅を属国にしました。そして大陸文化をどんどんとり入れるのです。半島の財宝は皇室の三つの蔵にいっぱいになりました。その蔵番の蘇我氏が外国の知識とともに大きな富をも手に入れ、後のわがまをすすめる原因ともなるのです。

## 大衆の生み出すもの

然らば吾々の作る句はどんな句であつたらよいかという疑問が、当然起る。

これに対して私は非常に苦慮した結果、この儘がよいという結論を得た。

既に大正の末期に於いて行詰りが来た如く、戦災直後、人心の復興とともに殷盛を極めた川柳界も、一応行き詰りが来たと見てよいと思う。昨今の世の中も各方面で行き詰りつつある如く、実は川柳界も行き詰ったと見るのが妥当である。これは自然の勢いで如何ともすることが出来ないが、俳句に於いて過去の歴史が語る如く、私達の祖先は必ずピンチに際してはピンチヒッターを送ることを忘れなかった。それが、芭蕉であり蕪村であり、子規であつたことを銘記してよいだろう。

吾々はつねに満ち足りないものをもっている、衣食の足るとか足らざるとかを問わず、人の世の苦悩を身に受けている。これが作句によって救われると知つたら、真剣にならざるを得まい。吾々の身辺には、川柳そのものが生活だと感じ、心にも染まぬ職業の傍ら、紙と鉛筆を離さぬ人が多い。ただ、芸術性を無視した大衆性は成り立ちそうもないことを知るべしである。また同時に、大衆性を無視しては芸術は停頓するばかりだということも顧みなければならぬ。

川柳は描写であると同時に、一つの真実でなければならぬ。それではなければ良い作品は生れないということを銘記したい。

## 1C・4C 朝鮮半島と日本

日本国家成立前後

漢の強い間は

1C

漢



本武尊の話もこういう間に生れ、伝えられたものであります。

吾妻はや今日もこんなに

晴れている

一つになれば一つに燃ゆる

火なれども

火合せに聖なる処女が

えらばれる

南におしやられ三つの小国家群にわかれていました。いわゆる三韓です。日本の統一はまだ充分できてはいませんでした。漢がおとろえ、亡びますと半島は半島人の手にかえり、北に高句麗、南に百済、新羅の三国の時代になります。統一のできたばかりの日本は、延びる力にまかせて、半島に

づきはせず、一〇〇年ほどたった聖徳太子の頃にはすっかり駄目になります。

字のかける男で小さい

出世する

日本語少しおぼえて

船にのり

土運び奴隷は蟻の如く

這い

## 句には真実を

さて前に戻って一応終止符を打たねばならぬ。

吾々の作句活動は、これからもずっとつづくのである。所謂「川柳の大衆性」とは、柳屋の古い浅いを問わず真剣に句と取組むことと解したい。

## 肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤



リポクール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

既田薬品



## ジヨツキ

## 中島生々庵選

## 路

## 集

大ジヨツキ娘が持てば一寸てれ  
淑女連注文したは中ジヨツキ  
二人のジヨツキはなんじ教でやめ  
タインドのジヨツキの魅力に負けている  
大ジヨツキ私も負けないイヤリング  
重そうな音でジヨツキ飲みはされ  
乾杯は嬉しジヨツキの泡がこぼれるよ  
中ジヨツキ一つきに空けた娘にあわて  
大ジヨツキ儲けた話聞きあきる  
若社員ジヨツキで不満吹き飛ばし  
乾杯へ女もジヨツキ持つて立ち  
かち合やすジヨツキ虚勢も張る世態  
大の男が小ジヨツキもてあまし  
帰えても待つ人のない大ジヨツキ  
握る手の重さが好きで飲むジヨツキ  
女客ジヨツキのおかわりはしい顔  
川風へジヨツキの泡がふきこぼれ  
飲めませぬジヨツキ片手に洗い顔

周甫 逸月 秋子 鮎子 万女 初甫 雄声 花車 弘道 粉洲 晃康 平々 庸佑 鶴汀 尚史 花美 光福

大ジヨツキ口より迎えにゆくビール  
入社一年ジヨツキ持つ手も青二才  
これからのジヨツキは敵を陥落すわな  
大ジヨツキ意外に大きいのだとけ  
大ジヨツキ胸のゆたかなネツクレス  
座より立つてジヨツキの都合よし  
胃袋の方があきれているジヨツキ  
コレクション 吞まぬジヨツキで棚飾る  
お師匠さんの腕にジヨツキは重すぎる  
紅一点すました顔で大ジヨツキ  
浮かぬ日は妻がジヨツキへついてくれ  
ウソもつくその唇に先ずジヨツキ  
生ビール泡がジヨツキにみな残り  
乾杯のジヨツキ大中小で上げ  
大ジヨツキ天皇杯のようにうけ  
一口で重いジヨツキが軽くなり  
失恋にジヨツキの泡もよくこぼれ  
知った顔にジヨツキを高くあつてみせ  
酔っている客にジヨツキもついて行き  
栄転の友人へジヨツキが小さすぎ  
水入らず楽しいジヨツキのまわしのみ  
二次会はジヨツキ一杯宛と決め

山椒坊 徹也 同 義流 兼治郎 圭井堂 隆史 妖人 醉夢 秀峰 博一 暖艸 忠三 宗太郎 定月 雄々 紡毛 保夫 同 藤波 同

おごられるジヨツキ大をと言いをけれ  
たいがいにおやめなさいというジヨツキ  
ビヤホールジヨツキの泡の忙しさ  
前祝いジヨツキは明日も勝つ自信  
屋上でジヨツキにわか雨に遭い  
乾杯へ女ジヨツキにジヨツキ入れ  
大ジヨツキ賭けたナイト入付かり  
満ち足りた顔で飲んで大ジヨツキ  
ジヨツキ一杯で済ます気を読みとられ  
ジヨツキがいいわと女の飲みつぶり  
大ジヨツキルージュなおして知らん顔  
銭湯に行くのがジヨツキ代も要り  
泡立ちもよしジヨツキで活を入れ  
大ジヨツキ泡吹き飛ばして飲むだけさ  
ホームラン出た日のジヨツキ高く干し  
乾杯のジヨツキへ流れ星が飛び  
土曜日の午後にジヨツキが誘致  
ボートが出た日をジヨツキ知って居る  
大ジヨツキ花火の見える店選らび  
ボートからおりてジヨツキの客になり  
ビヤガーデンジヨツキが高いものにつぎ  
大臣をこきおろして大ジヨツキ  
負勝合ジヨツキの知った事でなし  
大ジヨツキ分けて夫婦の仲の良さ  
小ジヨツキの泡が気になるみつちさ  
ジヨツキ片手に月給二倍論  
アロハシヤジヨツキへ吹殻捨てて立ち  
ババよりもマがジヨツキを派手にあげ  
一人なら一人の味ある大ジヨツキ  
退庁の足がジヨツキの泡へ向く  
ジヨツキへうつつぶんはらず社員  
ヘッターはジヨツキの泡で消えて行き  
旅はよし女房もジヨツキ吞むと云う  
二次会の顔はざらりと大ジヨツキ  
ジヨツキの空がたいきき音を立て  
涼しさにジヨツキ次々運んで来

八九寸 卯之助 竜蔵 井蛙 いわお 竜昭 清人 どんたく 九呂平 同 みのる 光太郎 笑太 静観堂 一鶴 同 幽谷 実男 豊年 雪美 祥月 和三四 同 蛙水 文庫 十九平 同 旭峯 向水 代仕男 孝一 雄木 むじな 惠三朗 生薑 蘭

顔の汗つるりと干すジヨツキ  
不景気な話とみえぬ大ジヨツキ  
生きたこと教えてくれたこのジヨツキ  
女の子の前だジヨツキをぐつとあけ  
大ジヨツキ話は後のことにして  
大ジヨツキ見事にあけて俺の子だ  
持ちつけぬ右手も使い大ジヨツキ  
佳

吉心 美音子 光子 圭木 ひか平 香林 風 一十 繁太郎 文庫 淀月 義流 宗太郎

大ジヨツキ課長はくしやみしてる頃  
大ジヨツキ持たせてピントまだ合わず  
天

一 人

福田妄夢選

どっちみち一人で故郷も遠くなり  
グループの一人だまつて嫁にゆき  
一人なら気楽でしようと他人様  
電化された一人暮らしがものたらず  
只一人強い意見に座は白け  
群衆の中で一人をかみしめる  
もう一人来ないと困る割勘定  
斗争も一人一人の主義でなし  
四十で一人金に頼りきり  
好きな人一人が味方してくる  
受付も給仕も兼ねている一人  
一人つぎの僕に雌蝶がついて来る  
親兄弟いまいせんと逞しい答え  
まだ一人大きな夢に燃えて居り  
甘党の一人が宴会反対し

笑太 清人 秀峰 醉夢 粉洲 どんたく 竜蔵 裕邦 鮎子 圭木 美音子 徹也 同 古心 孝風



# 柳界展望

句会

▼本社十月句会は七日(金)午後六時から日本

橋北詰東入る大阪観光ホテルで開催、道頓堀河畔の静かな雰囲気で作句三昧に浸るよう柳友を誘い合わせて出席されたい。▼南区医師会杏林川柳会(大阪市)は九月二十日(火)午後七時半から南区三休橋南詰中島生々庵居で開催。

▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は九月十六日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳会は九月二十四日(土)午後三時から大和竜田川畔の家で足立春雄氏博婦日歓迎句会として開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は九月二十九日(木)午後六時から難波の親和クラブで開催。

▼故勝谷山川児一周忌句会は九月十一日(日)、松江大橋のなにわ旅館で開催、在りし日の故人を偲んで盛会であった。▼川維備前支部八月例会は二十一日草二居で開催。

▼川維岡山支部九月例会は十七日赤岡山支部で開催。▼岡鉄クラブ文化部主催秋季川柳大会は十月八日正午から岡山鉄道局クラブで開催、兼題、電化・日帰り・商魂

・片言・税金。▼第六回全九州川柳作家大会は九月二十五日(日)午前九時から福岡市NHK放送会館で開催。▼国鉄加古川地区川柳会は九月十八日高砂神社へ移行。▼ひろしま川柳句会は九月十五日(木)午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼富柳会(富田林市)弘川寺吟行川柳句会は十月十二日二十一分富田林駅発で開催、兼題、欠伸・病人・定期。▼第八回東北川柳大会は十月九日(日)午前十時から仙台商工会議所で開催、兼題、ふらふら・連続・美人・包装紙・子供は見てい

る。とばかり・幕切れ・朝・麦飯。▼毎日新聞広島版の毎日柳壇第百回記念川柳大会は十月二十三日(日)午前十時から広島市袋町山陽記念館二階ホールで開催。

▼中村晴魚著川柳句集「お日さまお月さま」が昭和三十五年二月八日和歌山市東くぎぬき丁二ノ二和歌山番傘川柳会から発行された。柳歴十年の著者の六百六十六句が収録されている。B六判、頁七十頁、定価二百五十円。▼北柳吟社創立三十周年記念出版句集「浮雲」が十月出版を予定されている。昭和十四年以降の松丘保養園

の物語者、及び現会員の作品を収録した合同句集、B六版、二二〇頁、定価二〇〇円、送料三二円、申込先は青森市大字石江字平山一九北柳吟社発。▼房川素生句集「道」が昭和三十五年十月五日発刊される。生活川柳派と云われる著者の神戸柳界に四十年活躍された歳月の哀歌が五百数十句に採録されている。定価二八〇円、送料二四円。申込みは神戸市垂水区舞子川西町二四六浦上芳素生句集「道」刊行会。▼山川見句集「大橋」が九月十日に故人の一周忌を追憶され未亡人勝谷光子さんの手で刊行された。巻頭に路郎主幹の序文が掲げられている。B六版。一〇四ページ、非売品。▼「川柳二百人集」(山田凌甲編)が昭和三十五年九月十五日に金沢市泉野町三七えんびつ発行所から上梓された。B六版、二〇二頁、定価二〇〇円。

▼中島生々庵氏(大阪市)は九月二十二日医師の役員会で片山津温泉へ行かれ、数時間の余暇を割いて不朽洞会員の中山恒雄氏と歓談される予定との由、▼藤田蘇人氏(山口市)は山口駅長に栄転された。▼楊元紋太氏(西宮市)の句碑が神戸生田神社境内に建立さ

れ、八月十四日午前十一時から除幕式、記念句会が挙行された。「よく稼ぐ夫婦にもある一休み」▼井上湧三氏(大阪

市)はフランスのエビアンで開催される国際腎臓病学会並びに国際内科学会へ出席のため、八月十二日羽田空港を発たれた。学会終了後スイスに遊ばれ、九月五日雄峯マッターホルンを見に来たが相憎雨とのこと日本の自然によく似た山国ですと。▼戸田古方氏(豊中市)は八月六日から九日まで瀬戸内海の各所を周遊され、備讃諸島のスケッチなど多くの収獲を得られた。

▼西尾英氏(大阪市)は八月二十八日町会の五つ組の夫婦帯同で金沢、山中温泉を遊覧され、女房五人を上座に坐らせて下座に亭主が平素の御厄介を感謝しましたと、「妻と来た温泉湯の宿の虫の声」▼阿部佐保蘭氏(東京都)は八月十九日夫人同伴で伊香保温泉に遊ばれ、雨の榛名湖で都塵を洗われ

た。「傘借りて榛名湖畔の雨へ立ち」▼直原七面山氏(岡山県)は八月二十八日玉島市の友田観音奉賛川柳大会に出席、「言葉の使い方について」の柳話をされた。

▼若本多久志氏(西宮市)は八月二十日から二十四日まで箱根強羅ホテルに滞在、経営者ゼミナールに出席されたが、東上の途次、「こだま」から車内電話第一声を不朽洞へ掛けられた。「こだま」からモシモシ恩師の声を聞き」▼木山遠二氏(笠岡市)は八月二十一日並木会第二会川柳まつりの当日、遠来の七面山、一善、素身郎の諸氏と歓談、年に二度位、近景の不朽洞会員と顔を合せられる会を催したい念願とのこと。▼速水真珠洞氏(福岡市)は八月二十一日大分県湯の平温泉に遊ばれ、又、九

お買物は近鉄へ



アベノ  
**近鉄**  
電話 8331

た。「傘借りて榛名湖畔の雨へ立ち」▼直原七面山氏(岡山県)は八月二十八日玉島市の友田観音奉賛川柳大会に出席、「言葉の使い方について」の柳話をされた。

▼若本多久志氏(西宮市)は八月二十日から二十四日まで箱根強羅ホテルに滞在、経営者ゼミナールに出席されたが、東上の途次、「こだま」から車内電話第一声を不朽洞へ掛けられた。「こだま」からモシモシ恩師の声を聞き」▼木山遠二氏(笠岡市)は八月二十一日並木会第二会川柳まつりの当日、遠来の七面山、一善、素身郎の諸氏と歓談、年に二度位、近景の不朽洞会員と顔を合せられる会を催したい念願とのこと。▼速水真珠洞氏(福岡市)は八月二十一日大分県湯の平温泉に遊ばれ、又、九

月十六日高千穂の山岳の続きの海老野高源ホテルで静養された。

▼石川侃流洞氏(下関市)は昨秋以来高血圧症で作句に遠ざかっていられたが、八月二十一日山口県川柳大会に出席された由。▼正木章樹氏(金沢市)は九月一日金沢を免ち、西日本川柳行脚の旅に出られるが、その帰途大阪へ立ち寄り十一日の本社大会には是非出席したいと。▼田中辰二氏(熊本市)は昨秋以来医師から成るべく安静にと言渡され、又右腕の神経痛で御不自由な日を送っていられる由。▼藤村梨花さん(大阪市)は七月三十一日東京、大学で「織維学」の聴講を受けた由。

「東京の汗を拭いてる国言葉」の句信を寄せられた。▼浜田久米雄氏(岡山市)は七月三十一日岡山を出発、八月十四日まで、東京の中央鉄道講習所研修寮で講習を受けた。▼山田季賛氏(広島県)は七月十六日から二日間県北西部の恐羅漢山登山コースで過ごされた。「山越えのコースを遊ぶ足ならし」▼河相すむ氏(西宮市)は七月下旬社用で上京、茨城大学へ所用のため日立市に足をとばされた由。▼越智一本氏(冷治市)は八月九日原水爆禁止世界大会へ冷治代表として出席のため上京された。「一人が歩いて東京人のふり」▼福田丁路氏(高槻市)は八月一日から三日までの盛岡での研究大会を終え、十和田湖を周遊。湯瀬温泉に遊ばれた。「十和

石。八月中旬に退院出来る希望の観測とのこと。「隣床退院附添いに見送らせ」

#### 慶弔

▼布部幸男氏(京都市)は七月十七日一貫百匁という男の子をもうけられ、新(あらた)さんと命名された。▼平田三十郎氏(大阪市)は八月七日長男出生、陽一さんと命名された。▼西村梨里さん(河内市)は九月二十一日男児出生。お慶び申し上げる。

▼岩崎一伸氏(大阪市)の母堂雪さんは八月三日朝胆嚢炎で死去された。行年七十一。謹悼。▼田中烏耕氏(大阪市)は七月十二日肝臓ガンのため死去。十三日南区島の内三津寺で告別式が行われた。

氏は医博、元不朽洞会員、謹悼。

#### 転居

▼平沢保美氏は大阪市住吉区粉浜東之町三ノ七一へ。▼志水礼司氏は大阪市東淀川区三津屋南通り三丁目三一へ。▼藤本満年氏は岡山市住吉町二丁目四八へ。



北川茶会

(寄附者) 第十回記念句会  
三五・七・三 写真説明 前列左から三花如月・出原真澄・高木橋里・木山達二・佐内隆文・大山竜子・中列左から木山一灯・高橋心山子・田中脚註・大山山久・後列左から三花伯女・木山一光・川井香木・三花天平・坂本苗味・森本康幸・大山静人

## 新児童音楽サークル

(内容)

指導担当者

チエロ科 大坂放送音楽団 徳永 徳  
バレエ科 高田由紀子

事務所

主宰

新児童音楽サークル

TEL生駒27番

大阪市旭区北清水町九七〇(旭清水幼稚園内)  
TEL 5441 旭清水教室(バイオリン・ピアノ)  
大阪市東成区大今里北四  
TEL 6321 大阪バイオリン教室  
西宮市仁川町五丁目七番地(くるみ幼稚園内)  
TEL 西宮 0638 仁川バイオリン教室  
奈良県生駒市北新町(文化会館)  
TEL 生駒 315 生駒教室(バイオリン・チェロ・ピアノ・音楽・バレエ)  
奈良市あやめ池南二丁目  
TEL 富尾 377 あやめ池教室(バイオリン・ピアノ)

電話局番変更

▼中島生々庵氏の居宅の電話が自動式に変わり、局番が左記の通り改正された。堺6局〇八二四番、一七五番。(薫)

### 不朽洞

★常任理事会一七月二十六日(火)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療

### 会から

★退会一有働榮春氏(熊本市)は家事の都合により八月限りで退会。(多)

### 正誤

院樓上で開催、  
一、席題の件  
一、賞品の件  
一、大会委員依頼状の件  
一、表彰者への記念品贈呈の件  
一、その他の件  
右を審議九時散会した。出席者  
▼六月号二十九頁下段十六行目清水浅太とあるは蓮池風草の誤りに付訂正。▼八月号十六頁上段二行目の句主名紫香とあるは紫光の誤りに付訂正。▼前号四十九頁上段二十五行目の句主隆夫とあるは隆史の誤りに付訂正。

は路郎師、生々庵、文蝶、葉、竹莊、薫風子、多久志の諸氏。

★川雑誌四百号記念祝賀川柳大会実行委員会は八月二十七日(土)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院樓上で開催。

いのちある句を創れ



## 投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼締切毎月十五日▼投稿先  
本社宛

## 川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

パンガロ、から土砂降りが素晴らしい 保美  
土砂降りを全学連が尚猛けり 小松園  
土砂降りへあつさり脱いだへい 満秋  
人魂の消えたあたりの森黒し 千寿  
人魂の消えたあたりの森黒し 清人  
人魂の消えたあたりの森黒し 舟遊  
焼釜へ棺桶 足で押込まれ 良  
棺桶のバラシを足で押込まれ 海之介  
荒けなき音棺桶の釘をうつ 唯義  
棺桶に遺言状の念を押す 旅風  
しつくりとトランプ、セカンド、ローギア  
歯車のチビはくるくるよく動き 文秋  
歯車が休暇とくれた日曜日 慎太郎  
何処へ行く汽車が溪流渡るなり 白柳  
溪流のここらはデント製するところ すすむ  
溪流で欲にそまつた手を洗う 晃  
ざりざりの線で女は溪を越え 蝶花  
人の膝へくやし涙をこすり付け 蠶子  
涙見た時から男無言なり 蕙風子  
声あげて他人が泣いて呉れるなり 満潮  
意見する方から涙声になり 柳志  
母さんの涙を長女見逃がさず 連  
友達を涙を覗く幼稚園 玲人

## 川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂選

もらい泣きしながら次を聞きたがり 句念坊  
もらい泣きしたとは云わぬ話 義雄  
もらい泣きしても勘定して行き 三十郎

## 川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

そうめんの一本のどへ引つかり 小松園  
登台と僕が残った風の中 堀子  
幽霊の出てくる風が吹いてくる 白柳  
原爆忌二つに割れたメッセージ 葉光  
国寶としてメッセージをそつがなく 奈良子  
メッセージ八方美人に読み上げる 繁雄  
クロイドは終生消えぬメッセージ 生薑  
鹿島発ち声のはずんだメッセージ 山椒坊  
段取りが狂うはずではない月賦 文秋  
油虫段取りばかりしてサボリ 一三夫  
段取りをさすだけして参加せず 庸佑  
どこでどう段取りしたかニニニ 晃  
電報の誤字が生きてる人殺し 光福  
本茎の跡うるわしき中の誤字 すすむ  
御役所は誤字の訂正印だらけ 喜仙  
学歴を不審がられる程の誤字 玲人

## 川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

星の蚊はごろ寝の汗に寄りつかず 守信  
町中の寺が懇意で昼寝借る 有岡  
家族連れ楽しい避暑といふテント 春草  
宿題がそろそろたまる避暑の浜 光女  
団地風呂を飛ばして裏話 句念坊

## 川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

さからった後味の悪き菓子 美代  
抵抗のはかなさを知る腕の中 醉羊  
三才の反抗菓子へ振り向かず 一路  
さからうこと知らぬ耕牛農夫うち 北聖  
酒乱へ三度目の妻は負けていず 光郎  
酒乱の犬につかえていたわられ 味平  
おたよりは先ず筆不精を記してあり 美代  
消息へ都会の夏も書き添えて 醉羊  
同郷の帰省へ消息のんだとき 一路  
老父も折れていたとは風便り 魯木  
家計簿とにらみ合せた商品券 花江  
ひろいものしよに忘れた商品券 光郎  
商品券酒屋はジュースに替えてゆき 味平

## 川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

姑の灸跡よけて背を流す つる子  
ウインドへ鼻の跡残し寿司にする 啞雀  
地球乾き切り両手を下げて歩く 磔  
愛と言う乾きにもろきおぼえ 親生  
デモ隊遠ざかる国土増々乾き 白扇  
働きにゆく少年が市電待つ 藻介  
投げ玉の匂いの中を少年駆けける 紫蘭  
少年に Masturbation という単語 春抄  
金女酒摘うてこの世パラダイス 美佐緒  
楽園とかいた喫茶のサングラス 和三郎  
警官のデモ楽園の外をゆく 鳥雀  
陸官のききとりにくく幸多し 司郎  
茶碗の話しそれで楽しく晩 ゆきら  
睦言を聞き飽きもせぬ旅枕 生薑

## 川維 備前支部句会 (岡山県)

永松東岸報

信心をして宿命を断つつもり 芳月  
おこせにも似た宿命の相を受け 美音子  
子宝の無い宿命を猫と生き 美舟  
お願いの返事すぐにはして呉れず 博  
願いごと七夕縁は神秘めき 久米雄  
喉までも出かけた怒り笑ひ消し 草良  
月賦でも出かけた怒り笑ひ消し 明二  
お願いは選挙が終んだら逆になり 三六  
道楽と云われて趣味と云いかえし 秋月  
杖一本を宿命とする旨の歩 竜泉  
a<sup>2</sup>+b<sup>2</sup>へ父と子の頭 東岸  
三十度米すりすり流す汗 水仙  
道楽が先祖の田畑呑んで死に あや司  
百姓の願い 大空眺めて居 誠司  
丁寧の願い 大空眺めて居 誠司  
貧乏を宿命として笑いと請求書 謙仙  
屈辱へ返す言葉が喉で消え 輝次  
昇給の音頭をとって首になり 伊久野  
宿命とあきらめ切れぬ骨拾う 一  
宿命と夫婦は堪えることに馴れ 万女

## 川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

まださらの浴衣もおちちに化ける雨 圭井堂  
借金取に渡す金だが皺のばし 雄声  
二十年もうとつときもくたはれて 狂二  
習慣にしては寝酒のしつこすぎ 生々庵  
へべれけが大名づらして馬つれ 東天紅

ピース吸いつけて男を打診する 藻介  
見舞状出して不仲を打診する 千潮  
恋の距離僕は打診をされている 司郎  
嘲笑が背筋にうずく靴すべり 和三郎  
介解をすれば嘲笑裏に廻る 啞雀  
二階縮つて暖簾を掛けてあるホテル 鳥雀  
サングラス女ホテルの量を出る 磔  
灯籠の苦任職に情婦あり 幸男  
灯籠の教誨むこんが負けて行く 親生  
焼酎に足らぬ裸かの銭の音 紫蘭

へべれけの醜態夫に見せておき  
とつときを出したに縁談ことわられ  
ぐてんこに飲ましてあつて頼み状  
へべれけに肩を貸してゐるあはらしき  
習慣は恐いものだ子がいしめし  
集中豪雨になる雨がまたつづき  
実力を発揮することに狂わされ  
実力に生き実力に裏切られ  
ワキ役への拍手と主演気がつかず  
ワキ役とも云われ取巻とも云われ  
表彰もつづましくいゝ助演賞  
ワキ役でよしやり甲斐のある仕事  
敷いといて脇役ですとすまして  
食べ切れぬ割勘しちちんくやしがり  
母さんを探がとて敷帳の中を這い  
敷帳一杯にオラが嫌は気味悪し  
実力で仕上げてみよこの仕事  
実力が敷一匹の平手打ち  
八百長と言われ実力が減入り  
ワキ役に本当の芸を教えられ  
しづちんで通り寄附など言うてこず

好江郎 吸江 青一蛙 廣天郎 裕邦 古方 圭水 狂二 好郎 雄声 谷邦 末一 圭井堂 生々庵 左久良 紡毛 南蛙 青南 東天紅 白柳 徹也 新石

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

円満な夫婦に精進児が生れ 益子  
円満な噂の人に二号がい 杏生  
円満な見本にされた窮屈さ 生薑  
円満にすれば姑が氣を廻し こん太  
こと切れてから円満な相になり 宰子  
髪面のままの見合で氣に入られ 季宝  
旧式と云いつつ娘見合をし 昭子  
お見合に馴れて三十路に手が届き 天童  
親の氣も知らずに見合すつぽかし 仙人坊  
男みな頼りにならぬ見合擦れ 竜児  
手鏡が見合の朝へ小きすぎ 賢太  
恋人にことわり見合だけ済ませ 漠太  
写真とは三つ四つ老けていた見合 賤女  
お見合をしてから婦長かどが取れ 幸堂  
手足を猫は横目で眠つてい 柳谷  
握手だけで別れた彼が物足らず あきら

不足げに茶碗を叩く夕御飯  
持参金が娘の不足をカバーして  
父病んで手入不足の桃が落ち  
ビタミンの不足に酸っぱい夏みかん  
飲み足りぬ顔で課長をおだてあげ  
ことごとく不足をこぼす反抗期  
愛情の不足が招く置き手紙  
家中の不足は嫁がひの背負い  
満ち足りた家の子供の無い不足  
ホルモンの不足が妻のとげとけし  
待ち呆け同志と知って笑い合い  
待ち呆け食った二人が笑い合い  
待ち呆け週刊雑誌読み終り  
待ち呆けビルの灯一つ一つ消え  
待ち呆け洗濯物が氣にかかり  
待ち呆けの子へ誘惑の魔手がのび  
待ち呆けす小石もくく待ち呆け  
待ち呆けさせ愛憎たしめる  
愛すればこそ二時間の待ち呆け  
ことりともせぬ台所に姑がおり  
汗だくになって浮気に精を出し  
解散に備えて暑中見舞が来  
夕焼がキャンピングの肌を染め  
返り血を浴びた安眠を不安が  
アベックで歩きまわると娘は素直  
斬られ役にも貰うくのあるとし  
赤トンボ今日は裸の子に追われ  
ママにさえ見せない顔で手をあやし  
善人に世間の人がしておかず  
十代の恋がヨットの帆にかくれ  
網棚に日傘が残る終電車  
何時までも入陽に残る二人連れ  
ストッキングのすれが疲れる物語り  
肉体を売り物にするニ・ユ・エ・ス  
結婚をしてからがめついい兄になり  
結婚はもうこりこりと若い後家 天仁坊  
美沙 七面山 仙人坊 すみ子 天竜 幸子 周甫 益子 竜児 生薑 只世 喜楽 賤女 七面山 南鉢 美沙 静湖 久美子 順湖 ちとせ 信治 康技 みのる 山茶花 山茶花 登仙坊 天木 翠月 文舟 房子 柳田 緋田 田

川維 名古屋支部句会 (名古屋市)

そのボロは汗がにしては大きすぎ 野田一念報 随円

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄太郎

道ならぬ恋とアドルフ知つて 蛙眠子  
おれやら失礼やらを記する 吾柳  
道草をする気がわかる春の野辺 ユリ子  
お灸では駄目だと持った反主流 一保  
静養という名で母国あとにする ジャンゲルの人気更新して還り 幸子  
操従の一つ私め飲むけいこ 新雪  
酒が好き文も好きはよく似たこ 節枝  
ニンニクと酒で労働力に耐え 鶴丸  
女将が昨夜の酒を真似て見せ 翠月  
酒癖は悪くはないと紹介し 天邪鬼  
腹いせに欲しくない酒女房飲み 素三 瓢

川維 宇都支部句会 (宇都市)

津秋六花報

道なおし手よりも口がよく動き 福香  
低くければ頭も打たぬ人の道 青々  
通り魔によく似た顔に逢う小道 雄々  
値切られた客へお世辞のいる小店 一机  
しけ続き手持ち無沙汰の箱作り 芋人  
ジャズ植親父の小言うわの空 精耕  
暑中見舞これも裸で書いたよう 天邪鬼  
借金はないが人情に借りが出来 無閑  
口説かれて見た女にある魅力 青丸  
なつかしいエンターへ不足料はい 鶴香  
あじさいの末一色に氣を直し 秀峰  
短かめの浴衣もなつかしりの夕 秀峰  
変りだね当分女の話題増す 秀峰  
仏像の説明英語も中に入れ 三舟  
恩春期へ真相知りたいたいこと 雄々

川維 広島支部句会 (広島県)

平田越舟報

土壇場へもう倒産も悔いていず  
土壇場で親の意見が身を救い  
土壇場で打明け親を困らせる  
どたん場には女は媚びの手が残り  
どたん場へ来ては凡人のまだ迷い  
どたん場でおんなの愛にひきさら  
肩にも分も見越して掛けて売り  
競輪場車券のくずに夢をかけ  
紙屑の中でベストセラーでき  
どたん場の男らしさと女将目くらみ  
いざこに我が子も嫁に肩を持ち

川 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

涼み台うちわの蔭にあつた顔  
涼み台将棋の駒が転げ落ち  
涼み台話題がはす夜も更け  
雨の音ひるね涼しい部屋にする  
もう一つ泊れと星寝すすめられ  
涼み台ねた児へ送るうちわ風  
貧乏性かいなひる寝もして居れ  
涼み台の前で二人は別に行き

川 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平選

背伸びして熱海の月を止めて  
バックあるの知らず意地を張り  
PTAまだ家柄がものを云い  
頼まれた手紙出さず持ち帰えり  
宿題を解いて貰って思ひ出し  
呼び出しの電話安産知らせて来  
映画館今よいとこを呼び出され  
はてどなたでしたと頭かいて聞  
揮むよに頼んどいたに忘れられ

川 こまつ支部句会 (小松市)

伊藤泰弘報

お隣りの勝気アンテナ高く張り  
地味なのが似合う女のかしこ

停年に近く暮らしも地味になり  
地味に生きる気世間へ眼をとる

遭難が続いて山に箔がつき  
遭難の予感後から愚痴になり  
遭難を生きて返ってトッパ記事  
人工呼吸折る心に見守られ  
目かくしまで坑から生き還えり  
へそくりを掛けた月から待つ満期  
あきらめた旅行朝から暗れ上り  
浪人を二年進学をあきらめず  
見上げて止まる雨を待たない  
新婚の駅まで行きたい雨を待ち  
雨具持つ持たぬで出勤少しもめ  
恋を知り親に平気度で嘘が言え  
方便の嘘さえ正直気がとがめ  
舌出してゐるとも知らず信じて  
大穴が出て予想屋の音がかれ  
大声で喋る田舎のお人好し  
山彦を呼びたくもなる空の青  
大声の中に正直ものがいる

川 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

奥様と言われて二男こそはゆし  
からかえば娘は奥さんに言うとい  
奥さんのお気に叶った女秘書  
中古になる頃月賦やと済み  
中古になってようよう医者らしく  
中古になつて気兼ねもなく着られ  
中古の妻を見直す破産の日  
夕暮れを知らぬひよこを余し  
逃げ腰のみみずへひよこもあつ  
迷い子のひよこ何処か鳴きは鳴き  
口惜さはひよこにされた正義感  
仏前にまだ居る祖母の頼み事  
折角の感激コマーシャル消して去  
テレビ観る子が空で言うコマー  
泥棒を用心する程物も無し  
愛人が泥棒さんと間違われ  
泥棒はまだせぬと言う道楽者  
朱の唇がクローズアップ満員車

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口丹遊報

懐古の温み湛えて銀の色  
銀の鎧夫婦の歴史沈みいる  
銀煙管手の聞く方に廻つて居  
銀の食器磨き斜陽に客があり  
暇に生きたて銀貨の音ためす  
妻も子も捨てて夢中な恋に落ち  
ジャズソング黒人歌手の白い服  
ジャズ狂で飯を食う間もリズムカ  
ふ卵器でかえつたひよこのつら  
一番鶏聞いて体温計をとり  
雞の世話して中学生となり  
悪太郎という太陽が我が家にも  
太陽を虚勢の肩で受け博徒  
太陽に両手をあげた盲学生  
太陽へボキボキ骨を鳴らして見  
太陽の下で野良犬生きていて  
何事も控え目でいて銀が好き  
銀紙を釣くおののきに人と在り

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

延着の為に学生気をばもみ  
延着と判つて相手が納得し  
延着にマイクは慣れた訛を言い  
延着にしてこの空気が飲むとき  
延着の証明ポツポツ社へ歩む  
延着を妻も一緒に言訳し  
延着に便乗組も現われて  
延着をしたのに相三さん来て  
延着も苦になりませぬ二人連  
延着をつなぐ音楽長すぎる  
人生の試験六十路に尚足らず  
家族券後一枚を貸してくれ  
家族券お金と暇がもつとほし  
沿線を我物顔に家族券  
家族券今日に妹にして貰い  
家族券貸して欲しそな話し振り  
家族券息子が使うほどになり

杏林川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

一步出りや極楽とんぼ帰来す  
子沢山芽が出る頃にふけており  
芽が出たと思つたたん呼び出る  
極楽なんてフアンと笑う十世代  
芽が出ぬと今日も朝酒のんで  
芽と芽が出て廻転椅子の心地  
菊の芽を貰つた方が貰に入り  
金もある名も得た後は極楽よ  
極楽へ来てあの人が見当らず  
ネオンサイン極楽のように錯覚  
夕立へもう傘のタリミナル  
待望の夕立客足までさらい  
妻と歩く心齋橋は無口なり  
歩いて歩いても峠近寄らず  
別室へ社長さつさと消えて行く  
別室は別棟おはこび傘をさし

大阪逓信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

釣り草のわき毛にない無は心  
浮気する夫は達者と詮める  
どん臭い浮気地下道うちよろし  
悪友のせいにして二日酔  
どっちが悪友隠見合せて笑う年  
ABCも知らない母におさえられ  
先輩の云うABCは恋の事  
いろはよりABCをよく覚え  
イロハ順は古いとABCにかえ  
浮気して見たい裸を見て帰  
ABCぐらいいはという謙譲さ

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

反対を押した結婚破れ去り  
浪花節子が反対の多数決  
白い物黒いと言いたい人もいて  
反対の昔忘れ孫を抱き  
店先で子供に無理を遣される  
無理難題言うたは知らぬ二日酔  
無理をし乗ったバスが追い越され  
子の無理を聞く薄給の膳に座し

理髪屋の指へ芸者が惚れてくる  
紙芝居指をくわえた児もまじり  
バスガール指さすところ名所にし  
女房の金もうけ家にとじこもり  
金もうけ此処にもあつた川ざらえ  
芝居見たさお婆あちゃんしんし  
本妻と二号へ愛情使分け  
情けを受けて路傍に生きており  
お情けで貸せばなかなか立の  
行きずりの情がババとママになり  
御厚情謝して公約ふみにじり  
にせ物ににせものありと朱で書き  
にせものこまされてるケン坊  
にせものを本物にする香具師の舌  
鉄斎の偽筆を祖父は秘蔵にし  
王冠とラベルにせものとは見えず  
雅堂

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

へそ曲りなでと妻がかばつて出  
履歴書は香姐さん高女卒  
履歴書の要らぬヤクザに逆もう  
履歴書の文字そのまに四角はく  
発車ベル売店釣銭もどかし  
夫れを又利用しようとはそ曲り  
履歴書は物にならない職も書き  
駅前の売店デイトの顔覚え  
売店の軒にいっしか小鳥の巢  
では明日売店前でと受話器置き  
乱れたる私生活なり請求書  
私わねおおしいだいた請求書  
請求書にせぬ風にもしい込み  
芸術家より音痴のもてる薩し芸  
音痴には他人の音痴だけ解り  
未練などおまきかいと冷酒あり  
九紫  
好祐  
一平  
蒼芒  
風柳  
九紫  
晴暉  
雄水  
三明  
孝夫  
甲子朗  
柳影  
好平  
京一  
雅堂

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

夢消えぬ再会前のすばらしさ  
ボスのわけしついているかとボスが云う  
八郎  
心石  
柳波  
理休  
留鈍  
宏子  
洋子  
柳波  
石休  
北斗  
はたる  
留鈍  
龜心  
史

ボスまかり通る日本の民主主義  
大ボスの鶴の一声 厭ができ  
街のボス家では妻に飼育され  
尼さんの恋は新聞種にされ  
マンガだけ読んで店員飯にする  
へそくりがばれてクンカンのでんこ  
飲めとてくうあてのすすめり  
反対に賛成ですと手を上げる  
安反対ですと七十のおおあやん  
雨音を楽譜に若きピアノスト  
劇になる真葛ヶ原の春の雨  
雲行きを気づかないながら出す夜店  
まけときますと夜店呼び止めず  
秀才の何故か縁談またらず  
秀才の資金借つても行くと太鼓判  
秀才へ嫁にきたのがはや離婚  
秀才の部屋きつちりと鍵をかけ  
靖国に眠るあの子は秀でた子  
秀才が恋に破れてからかわり  
新米をやれば集金断られ  
新米の理窟も一度聞いてやり  
新米が美人の妻を持っており  
新米の初の仕事は茶運び  
新入社在学中は何してた  
新米の鯛のすで秋まつり  
表情も変えずに耐える未亡人  
無表情へせめ寄る母の気も  
表情を案じ話題を変えただけ  
表情も変えずうそをば並べたて  
どこに魅力妻も子もふりすて  
老父だけ知ってる母にある魅力  
薄物へ女魅力のありつたけ  
最後までボスが死なない予告篇  
増治郎  
紅月  
友子  
尚史  
柳太  
弘一  
周忠  
克一  
慶天郎  
六童子  
増治郎  
東雲楼  
好郎  
きはち  
生薑  
正博  
左良  
ふじ  
摩天郎  
尚史  
吸江  
紅月  
周一  
青蛙  
裕邦  
狂二  
太路  
雄声  
とも子  
松本  
六童子  
柳太

羽曳野句会 (羽曳野市)

板倉天悟空報

お座敷を囀る上手にくつろがせ  
嘘言わぬ子で何のとりえなく  
政治家に嘘発見器 験したい義雄  
嘘ならべ笑って儲ける漫才師 吉満  
押売の涙に強気の妻も負けまこと  
増治郎  
紅月  
友子  
尚史  
柳太  
弘一  
周忠  
克一  
慶天郎  
六童子  
増治郎  
東雲楼  
好郎  
きはち  
生薑  
正博  
左良  
ふじ  
摩天郎  
尚史  
吸江  
紅月  
周一  
青蛙  
裕邦  
狂二  
太路  
雄声  
とも子  
松本  
六童子  
柳太

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

病室へつるしても見る金魚鉢  
口下手はあいつだけを打って居り  
人生の岐路ともなったホムラン  
値の安い金魚が一番長生きし  
出目金の土産を妻にからかわれ  
説教をしてくる相手はのんでおり  
盛装の金魚器用にひれを振り  
夏やせをかくす化粧に念が入り  
時間一杯うちわの静止するテレビ  
新刊書パリック音のする頁  
水筒を証憑に遺骨 届けられ  
饅頭屋が開けばわけのない饅頭  
十代へ見られたくない予告篇  
お弁当の頃は水筒からになり  
買うてから妹のこわさがわかつて米  
注文をつけた新調断れず  
喜案

葦川柳会 (松江市)

田中妖人報

陳情困郷土名産添えて出し  
憂うつな身にまいまいこままいこ  
努力して居れば明日を信じ切り  
日本の憂うつデモに明け暮れる  
予防衣を替えて看護婦母となり  
努力してバスターをストとデモ  
耕転機とるレインコートなど知らず  
意気投合して酔いどれを帰る  
鏡台を並べ郷土がみな違い  
大鳥

交替をしてから後の列車事故  
非常バル鳴らず交替ホッとする  
酔い酔いの意気と女房だけは知り  
憂うつは夫の秘密知って 可  
借衣袋だとは言わないインビニ  
郷土いままの底なり陽が沈む  
孤呂二  
大前陽悦報

倉吉川柳会 (倉吉市)

大前陽悦報

背ばい靴が並ぶ一年生  
すり切れた三下靴で庶務の隅  
人生の門出へ靴の荷もふくれ  
弁当を持って靴を追って行き  
靴だけ課長と同じ初任給  
まっ先きに父の靴を子があける  
断りを聞かず押売り靴開け  
江戸前の看板が泣くすしの味  
屋台店馬鹿にならないにぎり  
ほうばった寿司の山葵に泪ぐみ  
祥天の裏を着て出る隠し芸  
役づけてまだもめている楽屋裏  
裏を出る姿を母に悲しまれ  
せつかに生れ裏から本を読む  
わらつかむ心で見本取り寄せる  
酔いどれの見本が車にのびて  
溜息とともに見本へまたさわり  
ウインドの見本通りに着こなせず  
弘朗

千日前大劇裏  
TEL 〇二七二〇

味よし  
アベノ橋近地下  
TEL 〇一四七

梅里の店

大萬

★大万川柳(第百十六回)を募る  
兼題「先 生」 路郎先生選  
締切・十月十五日 五句以内  
発表・十月廿一日 (店内掲示)  
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二  
大万川柳会宛

路郎  
メモ

★前号の「四〇〇号特集」はお蔭で予想以上に好評だった。ココでホッとしたらダメだぞ。あすから五〇〇号を目指して前進あるのみだと編集局は湧き立っている。私としてもそれに異存はない。

★回顧嫌いの私でも勢い回顧しないではいられない、悲しみも喜びも幾歳月だった。一冊一冊と積みあげて来た三十七年の間には世界戦争で敗戦の憂き目を見たし、多くの柳友や門下を喪ったし、苦悩の限りをくしたものだ。

★要するに誌寿四〇〇は川柳に対する私の情熱の所産である。それにしても、この情熱は私の終焉の日まで燃え続けることであろう。

★誌寿四百の祝賀記念大会は不朽洞会の人達に依って盛大に厳粛に行われた。私としてはあまり派手にやれぬよう、お祭り騒ぎに終らぬよう、特に望んでおいたが、その点式典なども中庸を得ていて、徐々に大会気分を盛りあげられ、まことに嬉しい集りであった。なお道を遠しとせず、二十年三十年会わない柳友の参加には終日おしゃべりをもって応えたほどのよこびだった。有難う。★特集号ははなばなく出た。記念大会では多くのなつかしい顔、顔、

顔に接した。次にはまた記念出版がある。この壮挙に対しても皆さんのご支援を得て有終の美をおさめたい。★物事は何でも、これでよいという訳にはいかない。雑誌の編集にしても、大会やその他の行事にしても、予測しない不行届きもあるだろうと思われるので、その点は老骨に免じて寛恕が願いたい。そして今後の「川柳雑誌」に倍旧のご支援をいただきたい。★最後に、近來郵便物の遅配、誤達が多かったので大変迷惑をおかけしているが、弊社の力の及ばない、郵便局のなすワザなので、その点お含みの上、一般的な世論で、排撃するようご協力が願いたい。近く選挙も行われるので、ここで一歩善政へ踏切れるようお互に監視してもらいたい。

### ・ ペンの散歩 ・

▼ツバメが軒から帰って行くと、こんどは雁が月の空へやって来る。爽秋読みのものとして、腹乃女史の「南紀一泊」田中美喜子女史（長二氏夫人）の「川柳継承」等女性の作品をハシラにした。前号の動、六才の静というわけだ。▼梨里前編集長のおめでたで主幹ご夫妻はこれで男子三人のお孫さんをもたれたことになる。九月はよこびごとが重なった。▼本社句会の会場が、改装成った大阪観光ホテルへ行く。月例会場としてはおそろく日本一だと思ふ。▼あと二冊でまた新年号だ、とにかく忙しいが楽しい日だ。（二三夫）

### ★十月の会々 川柳支部

★倉敷句会・1日（土）六時、題・広告・勝負・スクーター・思い付き・事故所、相原一善居★流川句会・3日（月）六時、題・信頼・御都合・彼女、所、十三西之町五丁目東流川郵便局★宇都句会・2日（日）一時、題・理性・取引・盲点・恩師、所、宇都市営バス終点前興炭労働会議室★かがみ句会・5日（水）夜、題・苦勞・ダム・麦族・別居、所、池田古心居★玉造句会・10日（月）七時、題・地図・エチケット・弱音、所、市電玉造南百米大阪信用金庫★京都句会・16日（日）夕、題・仰ぐ・虚病・蛤、所、四条御手仲源寺★にしなり句会・16日（日）六時、題・先生・しゃれこころぎ、所、玉出新町通一ノ一後藤梅志居★米子句会・16日（日）一時、題・家・水道・人、所、米子市公会堂★明和研究句会・9日（日）一時、題・故郷・帽子・笛、所、阪神鳴尾駅東南三百米鳴尾公民館★西宮句会・21日（金）六時、題・本棚・外人・反対、所、阪神西宮駅北出口スグ市立労働会館★阿倍野句会・19日（水）六時、題・遠慮・低音・シーズン、所、旭町二丁目金塚会館★備前句会・題・火鉢・天才・急用・世渡り・誤解★南海電鉄句会・27日（木）六時、題・単線・うやむや・泣き寝入り、所、難波親和クラブ★司前句会・月杓切、題・電話・地球・感傷・他に離詠、所、岡山県久米郡久米南町下町四五四、直原七面山居★高知句会・5日切、題・質・硝子・飲んだくれ・君と僕（蕉）

東野大八著

## 風流 人間横丁

価二百五十円  
送料 三二円  
B6型

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄いが、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。  
★本稿は戦后十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。随処に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

★出版予定日・昭和三十五年十一月月中旬  
★ご送金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇番をご利用が便利です。  
（切手代用可）

高鷲亜純著

## 詩川柳考

B6型函入 定価三百八十円 送料三二円

▼著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自負する柳俳人絶対必読の書

★出版予定日・昭和三十五年十一月月中旬  
★ご送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。  
（切手代用可）

発行所 大阪市住吉局区内  
万代西5丁目25

川柳雑誌社

振替口座大阪75050  
電話 大阪 6081

# 食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

10月号発売中

130円(〒12円)

特集

薬局食品は増えるか  
豆乳は脚光を浴びるか  
生活の中にコーヒーを

◇ 欧州と地中海域の果汁生産と消費  
粉 末 ジ ュ ー ス 談 義  
認識高まるシヨ糖脂肪酸エステル

◇ 菓子講座 ◇ 添加物講座  
◇ 海外情報 ◇ 特許告知板  
◇ 意匠ニュース ◇ 商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・添加物

大阪市北区  
木幡町5-5  
電話345231-4

食品と科学社

大阪府  
大阪702番

麻生路郎著

好評噴々

## 川柳の味方・五百数十句

川柳の味方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一氣に読ませる魅力がある。

発行所

川柳雑誌社

大阪府住吉区西五丁目二五番地  
電話 大阪 六〇八二  
郵便口座大阪七五〇五〇

価二五〇円  
送料三二円  
B6版  
二五〇余頁



お買物は…  
清く  
明るく  
美しい



大阪梅田・水曜定休  
**阪神**  
電大代表(36) 1201

スマートで  
着心地のよい

**O.S.K.の  
レディースード**

**大坂商店**

大阪市東区岸町一丁目二番地  
電話東(94) 745-5563番

川柳

親とこころ子心

価 150円  
送料24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳塔の巨中から親とこころ子心を選り抜いた多年の巨作とて、愛読者三、四百名、集めて二、三千余の観と子の愛が如何に深いものであるかを知らしめること、実に有意義な書である。

川柳雑誌社  
大阪府住吉区西五丁目二五番地  
郵便口座大阪七五〇五〇

若本多久志著 麻生路郎序

printed in Japan

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八二  
郵便口座大阪七五〇五〇

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

募 集

課題吟募集

西尾 栄選

長野 蛙選

後藤 志選

菊沢 小松園選

正木 水客選

弘半 休選

復屋 心選

職上 地選

近作柳塔

川柳塔

文 章

投稿規定

B列5号

毎月一回一日発行

川柳雑誌

第三十五年

第十号

定価 七〇円

(送料四円)

半力年

四四四円

一力年

八四〇円

(禁転載)

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

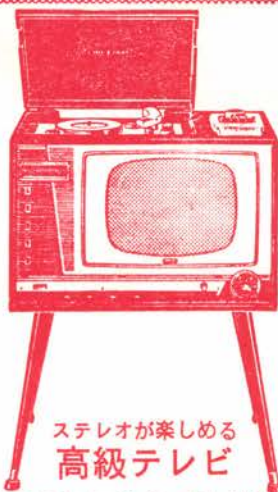
昭和三十五年九月廿五日印刷

昭和三十五年十月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二五番地

行印刷人 麻生路郎

昭和三十五年九月廿五日印刷



ステレオが楽しめる  
高級テレビ

テレビにステレオプレーヤーをセットした魅力  
の新装 2 ウェイ方式の本格的Hi-Fi設計です  
14型FP1 超遠距離用  
現金正価 75,000円 三洋電機株式会社



**サンヨー**  
STEREO VISION **テレビ**

あやめ池

11月27日まで

大菊人形



菊でうずまる会場の人気もの  
水戸黄門漫遊記 見流し23場面  
助さん格さん供にした 黄門さまの諸国漫遊記  
松竹歌劇 “秋のおどり” 円型大劇場  
グランド・ミュージカル 水戸黄門 16場  
世界一の水上ジェットコースター  
遊園地一周観光列車 菊花 ロープウェイ 遊戯具

大阪上本町から30分 片道80円・当日入園料100円  
(どちらも小人半額)・円型大劇場50円 小人30円

近畿日本鉄道



洗う...乾く...  
すぐ着られる

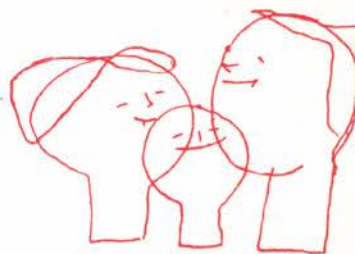
東レテロン65% 高級綿35% ●倉敷紡績

**クラブウ**

**テロンシャツ**

●姉妹品 クラブウテロンブラウス

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ⑥551-2